序章

昔、このウルマスという小さな国にあった人形のことを、みなさんは知っていますか？

それは、青い目をした、とてもかわいらしい女の子の人形。そで口に刺しゅうをあしらった黒い衣装を身にまとい、道行く人々にほほ笑みかける不思議な人形。

大きさも、思春期のころの人間の少女と同じくらい。しかも、白いヴェールで顔をかくしていましたから、本物の人間と見まちがわれてしまうことも、しばしばでした。

もっとも、そんな、魔法にかけられたみたいに動く人形など、この世にあるはずがないと、みなさんは思うかもしれません。

それも、しかたのないこと。ですから、古い神話に耳をかたむけるつもりで、これから語られる話を聞いてくださいね。

その人形の名前は、ナフィーサ。

これは、ナフィーサとナフィーサを懸命に守ろうとしたひとりの少女の、今では、ほとんど語り継がれることのなくなった遠い昔の物語です。

第一章　アイとナフィーサとその出会いのこと

一

今から、どれほど長い時間をさかのぼればいいだろう？まだ、地球がまるいということを、

ほとんどの人が知らなかったころのこと。

ウルマス国の片すみにある小さな石づくりの工房で、機織りをして暮らしているアイ（この地方で月を意味する）という名の少女がいた。

アイは、長い髪をうしろでしばった、黒いひとみに笑くぼが似あう、笑えば明るさがただようが、どちらかと言えばおとなしい性格の子だった。

もの静かでおだやかで、それでも、人見知りをするようなことはなかったが、ちょっと気が小さいところがあった。内気と言ったほうが、正しいかもしれない。

アイは、母さんから受けついだ機織り機で、布を織って生活をしていた。彼女は、まだ十四歳だったが、すでに家族がいなかった。

父さんは、石で建物を作る職人だったが、アイが幼かったころ、仕事中の事故がもとで亡くなった。

それからは、母さんが必死になってアイを育ててくれたが、体に無理をかけていたのだろう。一年前に胸を悪くして、あっという間にこの世からいなくなってしまった。

アイは、父さんが亡くなった時は、声をいっぱいはりあげて泣きくずれた。けれども、母さんが亡くなった時は、どういうわけか、ほんの少しの涙も流れなかった。

悲しくて悲しくて、こんなにつらいのなら、自分も母さんといっしょに死んでしまえばよかったと何度思ったかしれない。

それなのに、アイは、時が止まってしまったかのように、泣くことができなかった。

それ以来、アイは、ひとりで機を織って暮らしている。さみしくて泣きたくてたまらないのに、体が言うことを聞いてくれない。アイは、そんな傷ついた心のまま、ただただ、夢中で機を織り続けた。

仕事に熱中していないと、どうかなってしまいそうな自分が、こわくてしかたなかったのだ。

ある日のことだった。

アイは、三日かけて織り上がった布を、王宮前の市場の商人のもとへ納めにいった。代金は、たったの七ルクル。これは、ウルマス国で三日食べるのがやっとのお金だ。

つまり、アイは、その日その日を生きていくだけで精いっぱいの身の上だった。時には、食べることすら、ままならないこともある。

もっとも、アイにかぎらず、この国の子供たちの多くは、いつだって満足に食べられることがなかった。

道を歩けば、必ずと言っていいほど、お腹をすかせて泣いている小さな子供に出くわす。みんな、栄養が足りずに、あごの骨がとがって浮き出たような子供たちだ。

「これじゃ、パンとミルクのほかには、何も買えないわ。毎日、機を織っているのに、自分の服を仕立てることもできないなんて」

アイは、にぎりしめた七ルクルを、首からかけた巾着にしっかりとしまって、思わずため息をついた。食べられるだけでもありがたいと、感謝しなければならないのはわかっている

が、それでも、ため息が出てしまうのだ。

「ため息なんか、ついちゃだめよ。幸せが逃げてしまいますからね。いつだって、お日さまのように明るく笑っていれば、どんなにつらい時だって、なんとかなるものよ」

母さんが生きていたころ、よくアイに語っていた言葉だ。

母さんは、いつだって前向きで、何があってもへこたれない、まさに太陽のような人だった。

アイは、母さんのように明るくふるまうことはできないが、それでも、ねばり強くひとつのことに集中できる性格は、母さんゆずりかもしれなかった。

けれども、近ごろのアイは、ため息ばかりついてしまう、ちょっと気むずかしい少女になっていた。心をなぐさめてくれる家族がいない上に、満足なお金もないとなれば、それも、しかたのないことかもしれない。

すると、その時、そんなアイの心を逆なでするように、どこからか大きな笑い声がおこった。

「アハハハハッ、この人形見てみろよ！石を投げられたのに、ニタニタ笑ってらあ！」

自分のことを笑われたわけでもないのに、そのいやみな笑い方に、アイは、なんとなく腹が立った。

声のした方へ行ってみると、黒い衣装を着た少女に向かって、アイもよく知る近所の少年たちが、何人かで小石を投げつけていた。しかも、その少女の手首には、鎖のついた手錠が

してある。

アイは、驚いて声をはりあげた。

「あなたたち、何やってるの！」

言ってしまってから、アイは、しまったと唇をかんだ。その少年たちは、いつも、アイやほかの気の弱い子供たちをいじめては喜んでいる、不良の仲間だったからだ。

「なんだよ、アイ。おまえ、ずいぶんえらそうじゃないか」

少年たちの中でも、いちばん体の大きいリ―ダ―格の少年が、すぐさま、アイに因縁をつけてきた。

アイは、こわさにふるえて何も答えられなくなってしまったが、ちょうどそこへ、大きな荷物を肩にかついだ工夫が通りかかった。

工夫は、道をふさいでいる少年たちをじろりとにらみつけながら、「おい、小僧どもじゃまだ！」と大声で怒鳴り散らした。今度は、少年たちが、何も言えなくなってしまった。

「じゃまだって言ってるのが、わからねえか！」

荷物をかついだまま、こん棒のような太い腕をふり上げられて、少年たちは、たちまち顔色を変えて逃げだした。アイも逃げたかったが、足がすくんでしまって、その場から動くことができなかった。

工夫は、そんなアイにも冷たい視線を送ったが、そのまま何も言わずに立ち去っていった。

（助かった・・・）

アイは、胸をなでおろした。しかし、これでは、小さな鳥をねらっていた大きな鳥が、さらに大きな鳥に襲われたのと同じだ。

「こんなことして、何が楽しいのかしら？」

ころびそうになりながらかけていく、少年たちのうしろ姿を冷ややかにながめながら、アイは、だれにも聞こえないように、小さな声ではきすてた。それから、少女をふり返ってたずねた。

「大丈夫？ケガしなかった？」

ところが、少女の顔を見たアイは、驚きのあまり、そのまま地面の上にしりもちをつきそうになった。なぜなら、その少女は！

「に、人形？」

そうなのだ。アイがてっきり少女だと思いこんでいたのは、自分と同じくらいの背たけがある、木でできた人形だったのだ。

そう言えば、少年たちも、彼女のことを「人形」と呼んでいた。しかし、そのよくできていることと言ったら、自分の目を疑ってしまうほどだ。

西の国々に住んでいる人たちのような白い顔に、宝石のような美しい青いひとみ。身にまとっている黒い衣装も、ふだん、ウルマス国の人々が着るようなものではない。

木でできているのだから、たしかに、ひと目見ただけで人形とわかる顔だちなのだが、どういうわけか、見れば見るほど、本物の人間の顔に近づいてくるような気がする。

そして、さらにアイが驚いたことには、その人形がこちらに顔を向けてほほ笑みかけてきたのだ。

「本当だ、笑ってる・・・。あなた、名前はなんていうの？」

とまどいをかくせないでいるアイの問いかけに、人形は、首をかしげて困ったような顔をした。彼女は、ほほ笑むことはできても、話をすることができないようだった。

すると、別の声がアイの質問にこたえた。

「ナフィ―サっていうんだよ。わたし以外には、もう、だれもこの子の名前なんぞ気にとめないがね」

ふり返ると、ひものついた麻袋を肩にかけた老人が、アイのうしろに立っていた。髪もひげもまっ白なその老人は、めずらしいものを見るような目でアイをながめている。

けれども、その向こうにいる数人の男たちは、おだやかな老人の雰囲気とは、まるでちがっていた。

「おいっ、さっさと作業にかかれ！」

強い調子で老人にそう命令したのは、腰に長い剣をたずさえたウルマス国の兵士たちだ。彼らのひとりが、乱暴に老人の背中をつつき、それからアイを鋭くにらんだ。

「おまえは、どいてろ！」

なんて失礼な人たちかしらとアイは思ったが、さっきの工夫よりも恐ろしげな兵士を相手に、いざこざをおこすことなどとてもできない。

この国では、兵士がとてもいばっているのだ。それは、いつ大規模な戦争に巻きこまれるかわからないという、ウルマス国の事情があるからだった。

この国は、東の世界と西の世界の、ちょうどまん中に位置していた。

東の世界には、古くから続くとても大きな帝国があったし、西の世界には、長い戦争に勝ち残った新しい王国があった。

どちらも、自分たちの国土を大きくしようと、たくさんの軍勢を国の外へ送りだしていたが、その二つの軍勢のぶつかりあうところが、アイたちの住んでいるウルマス国のある場所なのだ。

だから、この国では、いつ戦争に巻きこまれてもいいように、兵力を強くすることに力を注いできた。それで、人々は、あまり兵士に逆らえないのだった。

老人は、ため息をついて麻袋をナフィーサの前に下ろした。中から出てきたのは、人形の修理に使う道具の数々。ナフィーサも、何をされるのかわかっているようで、鎖のついた手を下げておとなしくしている。

老人は、ナフィーサの背中にあるふたを開けると、ゆるんだ歯車を閉めなおしたり、油をさしたりした。

アイには、もちろん人形が動く仕組みなどわからないが、そんな彼女の目から見ても、ナフィーサは、ずいぶんかんたんな作りをしているように思えた。

（こんなので、さっきみたいに動けるものかしら？）

アイは、首をひねった。なんだか、だまされているみたいな気分だ。西の世界には魔法というものがあると聞いていたので、もしかしたら、それかもしれないとも考えた。

しばらくして老人の作業が終わると、手もちぶさたにしていた兵士たちは、「もう、いいな?ジャン」と、ぶっきらぼうに言った。

ジャンと呼ばれた老人は、「はい、異常はひとつもありません」と、落ち着きをはらって答えた。

「まったく、こんな気味の悪いものを、どうして放置しておくんだ?」

「さあな、命令だからしかたないだろ。手出しをすると、何がおこるかわからんからな」

立ち去っていく兵士たちが、腹立たしそうに、けれども、どこかおびえたように言いあっているのが聞こえた。

アイは、とてもいやな気持ちになった。こんなにかわいらしい姿をしたナフィーサをさして、気味が悪いだなんてどうかしている。

「おじいさん、いつもこうやって、この子の手入れをしているの?」

アイがたずねると、ジャンは、深くしわの刻まれた、やさしそうな笑顔を見せて言った。

「そうだよ。もう、何十年も続けてきたんだ。そうしないと、こわれてしまうからね」

「何十年も?わたし、こんなきれいな人形が近くにあったなんて、ちっとも知らなかったわ」

「それはそうだろう。この子は、ついこの前まで城壁の外に置かれていたからね」

「えっ、城壁の外?」

アイは、息をのんだ。

ウルマス国のまわりには、大きな石を積み重ねて作った城壁がそびえ立っている。王国と言っても、ひとつの町くらいしかない小さな国だったから、そうしておかないと、たちまち攻められてしまうのだ。

その城壁の外に置かれていたということは、いつ、ナフィーサがこわれてしまっても、かまわないというつもりなのだろうか？

「城の役人にずいぶん頼んできたんだが、どういういきさつか、急にここに移してもらえるようになったんだよ。兵士の監視つきだけどね」

ジャンは、そう言って、さみしそうに笑った。

それから、道具の入った麻袋をかついで、「さてと、わたしは帰るよ。きみも早めに帰りなさい。ナフィーサのそばにいると、何かと面倒に巻きこまれるかもしれないから」と言った。

アイは、うなずいたものの、本当は、もっと話を聞きたかったのにと思った。

ナフィーサは、このまま、ここに置き去りにされるのだろうか？どうして、ついこの前まで、城壁の外に置かれていたのだろうか？しかも、鎖でつながれたまま、野ざらしにされているのは、なぜ？

「ごめんね、また来るからね」

アイは、少しうしろめたいものを感じながら、こちらを見つめているナフィーサのそばか

ら離れて家路についたのだった。

二

アイは、工房に帰ってからも、ナフィーサのことばかり考えていた。

どうやって作れば、あんなふうに人間のように動けるのだろう？と疑問に思ったり、今ごろひとりでさみしくないかしら？と心配になったり、とにかく、頭の中はナフィーサのことでいっぱいだった。

あまり気になるものだから、アイは、次の日の朝、仕事をはじめる前にナフィーサのところへ行ってみることにした。

朝日が昇るのと同じくらいの時刻に工房を出て、まだ、だれもいない路地を歩いていくと、空気がひんやりととてもすんでいる。家々の煙突から出る煙も、まだまだまばらで、空にはうすく照らし出されたすじ雲が、寒々と数本だけたなびいている。

そんな、しんとした早朝の景色の中、ナフィーサは、きのうと同じ場所にきのうと同じように立っていた。

銅像のように身動きひとつしなかったが、アイが白く透き通るような手にそっとふれると、ナフィーサは、うっすらとまぶたを開いてアイにほほ笑みかけた。

（わあっ、やっぱり本物の女の子みたい！）

アイは、ややあらたまって、「おはよう」と声をかけた。

ナフィーサも、あいさつを返したがっているようだが、彼女はしゃべることができない。でも、わずかに動く表情からその気持ちは伝わってきた。

アイは、「ナフィーサ」と声に出して言ってみた。ナフィーサは、首をかしげて「なんですか？」という顔をする。

今度は、「わたしの名前は、アイよ」とナフィーサに教えてあげた。

手錠をされて思うように動けないナフィーサは、腰をかがめてアイの肩に顔を近づけた。まるで、「よろしくね」と言っているみたいだ。

気のせいかもしれないが、ナフィーサは、きのうよりも、さらに人間に近づいているように思えた。あいかわらず動きは不自然だったが、顔の表情が、ふっくらとやわらかくなっているような気がする。

「本当に、あなたは不思議な子ね」

アイは、もう、「不思議な人形」とは言わなかった。今、肩に顔を近づけられた時も、ナフィーサは、生きた人間と同じように温かかったと思うのだ。

「こんなところにひとりぽっちだなんて、さみしいでしょ？」

ナフィーサは、城壁のたもとの吹きさらしに、鎖につながれた姿でぽつんと立っている。雨を防ぐ屋根もなければ、風を防ぐ壁もない。

それに、色が黒いせいで気づかなかったのだが、ナフィーサの衣装は、よく見ると泥とすすでずいぶん汚れている。

アイは、ナフィーサがかわいそうになってきた。

仕事をするために、いったんは自宅に戻ったアイだったが、今度は、どうにもナフィーサの衣装のことが気になってしかたない。それで、思いついた。

（そうだ、わたしが、新しい衣装を作ってあげればいいんだ・・・）

アイは、機を織りながら考えた。

服を仕立てるのなら、お手のものだ。いつもの仕事のかたわら、あいた時間を使って少しずつ機を織れば、なんとかなるはずだ。

アイは、昼の休憩の時も、ナフィーサのもとへ足を運んだ。それから、仕事が終わったあとの夕ぐれ時にも様子を見に行った。

ナフィーサは、いつでも、道行く人々を見つめては、ひとりひとりに笑みを投げかけている。けれども、彼女にこたえてくれる人は、だれもいない。

「おまえさん、また、来てくれたのかい？」

聞きおぼえのある声にふり返ると、荷車を引いたジャンが、ひとりで立っていた。今は、きのうの兵士たちの姿はない。

「わたしも、ナフィーサのことが気になってね。少しでも雨風をしのげればと思ったんだ」

ジャンの引いていた荷車には、くいや板などの資材が積まれている。

「これで、ナフィーサのまわりをかこってあげるの？」

「そうだよ。城壁の外にあった時には、そうしてあげていたんだ。兵士たちがいない間にや

っちまおうってやってきたわけさ」

日暮れまでは、わずかな時間しかない。アイは、ジャンの作業を手伝うことにした。

まず、地面に石のくいを打ちこみ、そこに、なわで木の柱を結わえていった。それから、柱の間に板をはめこみ、さらに屋根も取りつけていった。

ジャンは、もう何度もこの作業をやってきたといった様子で、またたく間に人ひとりが入れるだけの小さな小屋を完成させた。これで、ナフィーサも雨風くらいはしのげるだろう。

「おじいさん、大工さんみたいね。死んだわたしの父さんは、石をあつかう建築職人だったの」

アイが感心したように言うと、ジャンは、「そうか、それは立派な仕事をされていたんだね。こんなものと比較されると、恥ずかしいよ」と頭をかいた。

「これを見たら、連中、怒るだろうな」

「連中って、きのうの兵士たちのこと?」

「あれらは、ナフィーサを、どこか遠くへ持っていってほしいと思ってるんだよ。ああ見えて、ナフィーサのことがこわいのさ」

ジャンは、奇妙なことを言った。兵士たちがナフィーサをこわがっているとは、どういうことだろう?

「なぜ、兵士たちがナフィーサをこわがるの?それに、どうして、こんなところに鎖でつながれているの?」

「そうだなあ、それを話せば長くなるなあ。今日は、もう日が落ちてしまったから、今度、聞かせてあげるよ」

ジャンは、あまった材料を荷車にのせながら言った。

アイは、ジャンが帰るのを見送ったあと、小屋の中のナフィーサの手を取って、「また、明日ね」と言った。

ナフィーサは、いとおしそうに目を細めて、アイを見つめている。

この、ものを言わぬ美しい人形に、どんな秘密がかくされているのだろう?今度、会った時、ジャンは、どんな話をアイに聞かせてくれるのだろうか?

夕闇に沈むナフィーサの小屋は、素人が即席で作ったとは思えないほど、うまくできていた。それを見ながら、アイは、ふと、元気に働いていたころの父さんのことを思い出していた。

三

その日、母さんから機織りのやり方を教わっていたアイは、朝から興奮しっぱなしだった。はじめてさわる機織り機。今までは、まだ早いからといって、ふれることすら許されなかった。

「そう、ここをこうしてこう」

母さんにうしろから抱えられるような姿勢で、アイは、自分の手に重ねられた母さんの手

の動きにしたがった。

この時、アイはまだ七歳。ふつうなら、まだまだ遊びたいさかりなのだが、このウルマス国に生まれ育った子供たちにとっては、将来の生活を支える仕事の手ほどきを受ける最初の年齢が七歳だった。

もちろん、七歳になる前から、子供たちには、さまざまな家事が与えられる。学校で学ぶ余裕はない。

子供たちは、仕事の中で学び、それを生きていくための知恵とした。食べることすらままならない貧しい生活の中では、そうすることしかできなかったのだ。

読み書きの手ほどきを受けられるのは、王族や貴族の子供たちだけだった。

だから、少数の王族貴族の子供と大多数の平民の子供の間には、生まれながら大きな差があった。大人たちが勝手に作り上げ、遠い昔から変わることなく続いてきた差だった。

これから先も、よほどのことがおこらないかぎり、この差が埋められることはないだろう。

けれども、アイには、近所の子供たちには内緒にしている秘密があった。実は、アイは、少しだけなら読み書きができたのだ。

教えてくれたのは、父さん。父さんは、石で建物を作る職人の親方だったが、その腕前はウルマス国の中でも有名で、王宮の設計にもたずさわるほどの実力を持っていた。

つまり、アイの父さんは、読み書きはもちろん計算までできる人だったのだ。

身分は平民でも、アイは、王宮の役人たちからも一目置かれる父さんのことを、とても誇

りに思っていた。そして、いつか、自分も父さんのように、王宮から仕事をもらえるような人間になりたいと、心の中で願っていたのだった。

ところが、その時、父さんのもとで働いていた職人が、アイと母さんのいる機織り工房にかけこんできた。ひどく取り乱しているその職人は、二人の姿を見ると、声をふるわせながらさけんだ。

「大変です！親方が、倒れてきた壁の下敷きに！」

信じられないような、言葉だった。

まだ幼かったアイには、いったい何がおこったのか、すぐには理解できなかった。ただ、大好きな父さんに、大変なことがおこったらしいということだけしかわからなかった。

けれども、母さんはちがった。さすがに、一瞬は、がく然とした様子の母さんだったけれど、すぐに口もとを引きしめて立ち上がった。

「アイ、あなたはここにいなさい」

母さんは、さっきまでのおだやかな口調とは、まるでちがった声色でアイに命じた。

「いやだ、わたしも行く！」

だだをこねるアイに、母さんの厳しさは変わらなかった。

「だめ！あなたは、ここで待ってるの！」

「いやだ、わたしも行く！」

絶対に譲れるものかと、アイは思った。父さんの身にどんなことがおこったのか想像する

のもこわかったが、このまま、ここにいてはいけないという思いが勝った。

アイは、職人とかけだした母さんのあとを追った。小さな子供の足で走っている大人に追いつくのは、かんたんなことではなかった。

それでも、アイは必死だった。必死になって、父さんの無事をたしかめたかった。

父さんなら、きっと大丈夫だ。倒れてきた壁の下敷きになったって、父さんなら大丈夫に決まっているのだ。

なぜなら、アイの父さんだから。頭がいいだけでなく、腕っぷしも強い父さんが、壁が倒れてきたくらいで、どうかなってしまうはずなどない。

きっと、何かのまちがいだ。もしかしたら、下敷きになったのは、別の人かもしれない。あわてた職人が早とちりをした可能性だってある。

しかし、父さんの無事を願う、そんなアイの思いは、あっけなく裏切られた。

結局、母さんには追いつけなかったが、人だかりを頼りにアイが事故現場にたどり着くと、そこには、むしろをかけられている父さんがいた。

父さんは、地面に横になったまま、ピクリとも動かない。かたわらにいた母さんが、父さんの胸のあたりに顔をうずめて肩をふるわせている。

「父さん、どうしたの？なんで、寝ているの？」

アイは、母さんのとなりにたたずんで、自分でも信じられないくらい間の抜けた質問をした。寝ているわけではないことくらい、たずねなくても明らかなのに。

「ねえ、父さんをおこしてよ。わたし、まだ、機織りの練習しなきゃならないんだから。ねえ、母さん。父さんをおこしてよ」

母さんは、泣きはらした顔を上げると、感情を失ったかのような娘の顔をふり返った。

不幸は、突然やってくる。予告もなく、その直前まであたりまえだと思っていたささやかな幸せを、何のためらいもなく奪い去っていく。そのことを、母さんもまた、この時はじめて知ったのかもしれなかった。

母さんは泣いた。立ちすくんだままのアイの体を、必死に抱きしめるようにして泣いた。

そして、アイは、わけもわからず流れ落ちてくる涙でほほをぬらしながら、その場にくずれ落ちた。「父さん、おきて！」と何度もさけびながら。

父さんは、いっしょに働いていた仲間の身代わりになって命を落としたことが、あとになってわかった。

壁の下敷きになりそうになった仲間を、全身を使ってとっさに突き飛ばしたせいで、自分の上に壁がくずれ落ちてきてしまった。

息があったのは、一瞬だけだったという。即死だった。

重い石の壁によって、体をつぶされてしまった父さん。どんなに痛かっただろう？どんなに苦しかっただろう？

そのあまりにも無残な死の瞬間を想像するたび、アイの心は、激しくゆれ動いた。

一方、母さんは、それまでとは人が変わったように、よくしゃべり、よく笑うようになっ

た。

もともと、母さんは、近所の人と大声で話したり、お腹を抱えて笑うような性格の人ではなかった。どちらかと言うと、もの静かで、じっくりと目の前のことに集中するようなタイプだった。

そんな母さんが、父さんの死から一週間もすると、ちょっとしたことにも口を大きく開けて笑う陽気な人になった。

アイには、それが不思議でならなかった。母さんは、父さんがいなくなって、うれしいのだろうかと疑問を持ったりもした。

アイは、母さんとは反対に無口になった。母さんが、明るくふるまえばふるまうほど、会話をするのがいやになった。

そのころからだ。母さんが、「ため息なんか、ついちゃだめよ」と言うようになったのは。

おそらく、アイは、自分でも気づかないうちに、ため息をついていたのだろう。

父さんに会えない。家族のために、一生懸命、働いてくれた父さん。仕事の合間を見つけては、アイに読み書きを教えてくれた父さん。食事の時、アイをひざの上に乗せて、色々な話を聞かせてくれた父さん。

「母さんは、父さんがきらいになっちゃったんだね。父さんが死んじゃって、すっきりしたと思ってるんだね」

とうとう、ある日の夕食の席でアイの怒りは爆発した。母さんが、それまで毎日テーブル

にならべていた父さんの食器を、あえて出さなかったのが原因だった。

「わたしは、父さんのことを忘れられない！母さんのように、はじめから父さんがいなかったような顔なんかできない！」

アイは、テーブルをたたいて部屋を飛びだした。それから、自分の寝床にもぐりこみ、わあわあ声をあげて泣いた。

いつまでも、ずっと変わることなく続くと思っていた家族の幸せが、音を立ててくずれていく。

アイの心の中は、年齢よりもずっと早く大人になっていた。無理にでも、ならざるをえなかったのだ。

四

ナフィーサの衣装を作ってあげるというアイの計画は、順調に進んでいた。

アイは、来る日も来る日もふだん以上に働いて、少しずつナフィーサの衣装を仕立てていった。

今は、少々うす汚れて見えるナフィーサだが、新品の衣装に着せかえてあげれば、みんなの彼女を見る目も変わるはずだ。

もちろん、もともとの仕事があるので、ナフィーサの衣装作りに使える時間は、少ししかない。それでも、アイは、食事の時間を削ったり、ねむる時間を少なくしたりしながら作業

を続けた。

けれども、せっかくの真新しい衣装も、はき物が汚れたままでは、だいなしになってしまう。

そこで、アイは、自分が食べるパン代を節約してお金をためることにした。衣装は、材料費だけで作ることができても、はき物は、市場で買うしかないからだ。

アイのはき物だって、もうじき穴が開いてしまいそうだったが、彼女は、まずナフィーサのはき物を先に用意してあげたかったのだ。

そうしているうちにも、アイは、毎日、ナフィーサのもとへ通ったが、ジャンからこの不思議な人形の秘密について聞きだすことはできなかった。

なぜなら、ジャンに対する監視の目が、よりいっそう厳しいものになっていたからだ。今では、会話をすることもままならない。おそらく、勝手に小屋を作ったことをとがめられたのだろう。

ナフィーサの整備にやってくるジャンのまわりには、つねに五、六人の兵士たちがついていた。そして、いまいましそうにナフィーサをながめては、近くにいるアイを怒鳴りちらす。

ナフィーサとなかよくしているアイのことが、気に入らないようだ。

そんな時、ジャンは、兵士たちに気づかれないようにこっそり肩をすくめて、アイに目くばせする。

「逆らっちゃあ、いけないよ」

もちろん、アイだって、兵士たちには逆らえない。彼女は、歯を食いしばって、くやしい気持ちをおさえるしかなかった。

そんなある日のこと。

その日は、朝から強い雨が降っていた。

水の少ないウルマス国では、雨はとても貴重だ。雨が降るのは、一年の間でだいたい決まった時期だったが、降るとなると、どしゃ降りになるのがこの地域の特徴だった。

もちろん、アイは、雨などおかまいなく、ミノとカサを身につけてナフィーサのもとへ出かけた。いや、雨だから、よけいに不安になるのだ。

朝、昼、夕。今となっては、一日三回、ナフィーサの様子を見にいくのが、アイの日課になっていた。

ジャンと会えるのは、三日おきの昼。今日は、その日だ。

雨は、昼になってもやむ気配がないばかりか、ますます激しくなっていた。小屋のおかげで、ナフィーサが雨にぬれることはなかったが、この先、雨もりしないか心配だ。

そこへ、アイと同じようにミノ姿のジャンがやってきた。もちろん、いつものように数名の兵士たちが脇を威嚇している。

「雨なのに、ご苦労さま」

アイが声をかけると、ジャンは、「きみこそ、ご苦労さま。かぜをひかないようにね」と言った。

強い雨の中での作業に、兵士たちは、いつも以上にジャンを急かせて早く帰ろうとしている。

「おじいさんも、体に気をつけてね」

アイも、兵士たちにあまり聞かれないよう小さな声で言った。

アイは、ジャンに聞きたいことがある。ナフィーサを作ったのは、あなたなのかと。

そして、何のためにナフィーサを作ったのか。どうして、木でできたナフィーサが、まるで人間のように動くことができるのか。なぜ、兵士たちはナフィーサを恐れ、うとんじているのか。

アイから見るジャンは、いつも笑顔を絶やさないやさしい老人だ。やさしくて、そのくせ、ふとした瞬間に、今日の雨のように激しく悲しそうに見えることがある。

何かがあるのだ。ジャンとナフィーサの間には、一言では語りつくせない何かがあるはずなのだ。

「よしっ、引きあげるぞ!」

ナフィーサの整備が終わるのを待ちかねたように、隊長らしき男が号令をかけた。

兵士たちは、隊長にしたがって雨の中を歩きだした。アイに声をかけようとしたジャンも、無理やりつれていかれてしまった。

その時、隊長の腰から何かが落ちるのをアイは見た。ひどい雨足に気をとられて、隊長は気づかない。

（鍵だ！）

アイは、息をのんだ。それから、すぐにそれを泥の中からひろいあげて、ふところにしのばせた。

（もしかして、これは。そう、きっと、これは！）

兵士たちがいなくなるやいなや、アイは、すぐに鍵を取りだし泥を指でぬぐうと、ナフィ―サの手錠の穴にはめこんだ。

やはり、そうだ。鍵はいともかんたんにまわり、重い手錠があっさりとはずれた。

（逃げようか？）

アイが、とっさにそう思ったのも無理はない。

けれども、アイはすぐに考えをめぐらせた。今、このままナフィ―サをつれて逃げたところで、すぐにつかまってしまうにちがいない。

兵士たちも、毎回見かけるアイの顔はおぼえているだろうし、せまいウルマス国の中では、追っ手から逃れることはできないだろう。家の中にかくまったとしても、たちまち見つかってしまうのが落ちだ。

それでも、兵士たちのいない時間を見はからって、ナフィ―サをどこかへつれだすことくらいならできるかもしれない。鎖につながれたまま、身の自由を与えられていなかった今までとくらべたら、それだけでも大きな前進である。

アイは、思うのだ。もともと、人形は、だれかに見てもらうためにあるものなのだと。だ

れかに見てもらい、見た人の心をあたたかくするもの。そして、時として勇気を与えるものなのだと。

にもかかわらず、今のナフィーサは、うす汚れた雑踏で石を投げられたり、さげすんだ目で見られるばかりで、人形として、あまりにもかわいそうだ。

それなら、少しでも明るい世界に出かけて、新しい衣装に身を包んだナフィーサを人々に見てもらいたい。そうすることで、もしかしたら、今の境遇から抜け出せるかもしれない。

大人から見れば、それは、子供の他愛ない発想だったかもしれないが、アイは、大まじめだった。

「ナフィーサ、わたし、すごいもの手に入れちゃった。でも、少しだけ待ってね。あなたの衣装ができあがったら、もっと明るくて楽しいところへつれていってあげるから」

アイは、そう言って、こみ上げてくる胸の高鳴りをおさえながら、ナフィーサのもとをあとにした。

さあ、ここからが大変だった。

アイは工房に帰ると、さっそくナフィーサの衣装作りに取りくんだ。こうなったら、もう一日でも早く仕上げなければならない。隊長が鍵をなくしたことに気づいてしまえば、ナフィーサをつれだすというアイの計画は、水の泡になってしまう。

もっとも、アイは、兵士たちがナフィーサの鍵をはずすところを一度も見たことがなかった。ナフィーサは、今の場所に放置されているだけで、どこかへ連行されるわけでもなかっ

たから、わざわざ、鍵をはずす必要がないのだ。

だから、アイは、計画の成功にほとんど疑いを持たなかった。

うまくいけば、そのまま、今の環境から逃げられるかもしれない。どこへ逃げればいいのかわからないが、ナフィーサとなら、どこへだって行けそうな気がしてきた。

アイは、今まで以上に朝早くから夜おそくまで働いた。働いて働いて、もしもの時のために、できるだけお金をためていった。

すべてがナフィーサのためと思えば、少しくらいお腹がすいていても平気だった。睡眠不足も、がまんできる。

そうして、数日が過ぎた。

「できたっ！」

人々が寝静まった深い夜、アイは、ようやく仕上がった新しい衣装を両手で高くかかげた。

それは、今までの黒い衣装とはまったくちがう、よく晴れた空のように青いものだった。黒い衣装も、それはそれですてきだったが、やはり、ナフィーサには、もっと明るい色合いのものを着せてあげたいとアイは思ったのだ。

それで、ナフィーサのひとみの色と同じ青い布を織って、そで口やえりもと以外にも、たくさんの刺しゅうをあしらった。西の世界の貴族たちが着ているものに、これまで以上に似ているかもしれない。

アイの目の下には、病人のような黒いくまができていた。ここしばらく、食事も満足にと

っていなかったため、少しほほがこけているようにも見える。

それでも、アイは満足だった。これを着せれば、どこへつれていっても、ナフィーサは、みんなからあこがれの眼差しでながめられるようになるはずだ。

人形であることがわかりにくくするための、ヴェールも用意した。はき物も、わずかなたくわえを切りくずして、ヴェールと同じまっ白なものをそろえた。

アイは、そこで「そうだ!」と手を打ち鳴らした。

せっかくだから、まず、自分で着てみよう。ナフィーサとは体型が似ているから、うまく着られるはずだ。

そう考えて、さっそく新しい衣装に袖を通してみた。足にはき物をあわせ、生まれてはじめてのヴェールもまとってみた。

それから、部屋のすみに置いてある立ち鏡の前に立った。鏡面がくすんでいるが、当時としてはめずらしい全身が映せる鏡だ。

「うわあ・・・」

アイは、思わずため息をついた。

鏡に映っているのは、見なれたひとりの少女だった。食べることさえままならず、いつも無造作に機を織っているアイという名の貧しい少女。

けれども、ナフィーサの衣装を身にまとった彼女は、王族や貴族も目をまるくするほど、気品のある美しさに満ちていた。

「これ、本当にわたし？」

アイは、食い入るように鏡面に鼻先を近づけた。そして、すぐに思った。

（わたしって、母さんに似ているんだ・・・）

あたりまえのことに、今さらのように気づいた。

切れ長の目も、ひきしまった口もとも、それに、つやのある長い黒髪も、若く輝いていたころの母さんの生き写しのようだ。

思わず、鏡の前でクルリとまわってみた。おどるように、歌うようにまわってみた。まるで、母さんが舞っているようだった。

（そうか、わたしは、母さんにそっくりなんだ。どうして、今まで気づかなかったんだろう？大好きな母さんが、こんなすぐ近くにいるのに！）

アイは、白い歯を見せて笑った。それは、ひとりで生きるようになってからずっと忘れていた、彼女の本来の笑顔だった。

アイは、何度もまわった。そうしていると、体にこびりついた昔のつらかったできごとが、どこかへ飛ばされていくような気がした。

しかし、そんなアイの無邪気な姿が鏡に映っていたのは、ほんの短い間のことでしかなかった。

鏡の前で舞うのをやめた時、アイの顔からは、それまでの笑みが、まるで水に洗い流されてしまったかのように消えていた。

「母さん・・・」

消え入りそうなため息が、アイの薄く広げられたくちびるの間からもれた。

はしゃいだ後にわきおこったむなしい気持ちは、ひとりぼっちの工房をさらに寒々と暗いものにさせた。

母さんは、死んだのだ。どんなにその幻影を追い求めても、もう二度と話をすることはできないのだ。

アイは、今、いちばん悲しかったあの日に思いをはせていた。母さんの命が燃え尽きた、悪夢のようなあの雨の日に。

五

父さんのことで、母さんとケンカになってしまったアイだったが、だからといって、彼女はいつまでも母さんのことを憎んでいたわけではなかった。

仕事の時は、よく母さんを助け、言いつけもきっちりと守った。貧しい食卓をかこむ時も会話ははずんでいたし、笑顔も絶えなかった。

母さんが笑えば、自然にアイの顔にも笑みがこぼれた。

だから、アイは、母さんがよく笑うようになったことを、けっしていやだと思っていたわけではない。

ただ、父さんが亡くなった前後であまりにも態度が変わったから、それが理解できないだ

けなのだ。

父さんがいなくなってから、五年の月日が流れていた。アイは、十二歳になった。

そのころのアイの家は、まさに貧乏のどん底にあった。

父さんのかせぎがなくなった今となっては、母さんとアイの機織りの仕事だけが、すべての収入源だった。

だから、少しくらいの考え方のちがいがあったとしても、家族は手を取りあって生きていくしかなかった。

女だけで生計を立てるのは、本当にむずかしい時代だった。働いても働いても暮らしは楽にならず、わずかな貯蓄は、またたく間に失われていった。

ある日、アイと母さんがいつものように仕事をしていると、見知らぬ老若二人づれの男たちが工房に入ってきた。

入ってくるなり、「なんと汚ねえところだなあ」と若い方の男が悪態をついた。そういう男たちの身なりも、ずいぶん粗末なものだったが、母さんは、ていねいに頭を下げた。

「すいません、今は払う分がありません。一週間だけ待ってもらえませんか?」

母さんは、余分なことは言わずに、いきなり本題に入った。

「またかね?おれたちも無理なこたあ言いたくねえが、元締めがうるさいんだよ」

今度は、年老いた方の男が口を開いた。

「すいません。一週間後には必ず払えるあてがあるんです。どうか、それまで・・・」

母さんは、何度も「すいません」をくり返しながら、しばらくの間、男たちと押し問答をしていた。

アイは、機織り機の前に座ったままポカンと口を開けていたが、どんな話をしているのか、およその見当はついた。

しぶる男たちをようやく追い返した母さんだったが、その顔には、深い疲れの色が残っていた。

「ごめんね、ここには来ないよう言っておいたのだけれど」

母さんは、不安そうな目をしているアイに向かって笑顔をつくろった。アイは、たずねた。

「お金を借りているの？」

「まあね」

「どのくらい？たくさん？」

「たいした金額ではないのよ。一時的に借りただけのものだから、アイは何も心配しなくていいのよ」

そう言われて安心できるはずもなく、それからというもの、アイの頭からは、母さんと取り立てに来た男たちとのやりとりがこびりついて離れなかった。

けれども、母さんはと言えば、それからも、あいかわらず笑顔を絶やさず毎日を元気に過ごしているかに見えた。ため息なんか、絶対につかなかった。

そんな母さんの姿に、さすがにアイも感じるところがあった。

何があっても、へこたれない母さん。いつもの言葉どおりだ。母さんは、いつだってお日さまのように輝いているし、そんな母さんのまわりには、不幸など取りつくしまもないのだ。

アイは、やっぱり自分も母さんのようにならなければいけないと思った。だから、できるだけため息をつかないようにしたし、いつも笑顔でいられるようにもした。

でも、それはそれでなかなか疲れることだった。時には、だれかに思いっきりもんくを言いたくなることもある。そのだれかがいないから、つい母さんにあたってしまったりする。

それでも、母さんの笑顔は絶えなかった。すごい母さんだと、アイは思った。

ところが、取り立ての男たちが来てからしばらくたった、ある日のことだった。

その日、織りあがった布を納めに市場へ出かけたアイは、帰りに母さんから言いつけられた食材を買って工房に戻ってきた。

久しぶりに高値がついて、思った以上のお金が手に入った。それがうれしくて、アイの心ははずんでいた。

ちょっとしたいたずら心が働いて、母さんをうしろから驚かせてやろうと思ったのも、そのせいかもしれない。

けれども、足音を立てないようにして工房に入ったアイは、そこに母さんがいないのを見て、なあんだと肩を落とした。

どこへ行ったのだろう？

アイは、部屋のすみのテ―ブルの上に麻袋に入れて持ち帰った食材を置くと、裏庭をのぞ

いてみた。

母さんは、そこにいた。

でも、なんだか様子がおかしい。こわれかけたベンチにしゃがみこんで、いつになく背中をまるめていた母さんは、自分の指先に視線を落としたまま肩をふるわせていた。

アイは、おどろいた。

母さんが持っていたのは、父さんがはめていた指輪だった。二人が結婚した時、ウルマスのしきたりにのっとっておたがいの指にはめた蛍石の指輪だ。

「泣いているの？」

そう声をかけそうになって、あわてて言葉を飲みこんだ。

母さんが泣いている？いつも笑顔を浮かべていた元気いっぱいの母さんが、だれにも知られないところで泣いている？

アイは、見てはいけないものを見てしまったような気がした。母さんは、けっして父さんを忘れてなんかいないのだと、この時、はじめてわかった。

がまんをしてきたのだ。母さんは、アイの前で泣き顔を見せてはいけないと、無理に笑ってがまんをしてきた。

突然の事故で父さんが死んだ時、母さんは、自分に言い聞かせたのだろう。

わたしが、泣いていてはいけない。わたしが元気でいなければ、だれがこの家を守るのかと。

だから、母さんはいつでも笑った。時には、大げさすぎるとアイが思ってしまうほど、声を立てて笑った。笑いながら、母さんは、負けそうになる自分といつも戦っていたのだ。

なぜ、こんなふうに考えたのか、アイは、自分でもわからない。

いや、本当は、はじめからわかっていた。自分も母さんも、父さんがいなくなって、自分たちだけで新しい生活を築いていかなければならないと、心のいちばん奥深いところで気負っていたということを。

それから、しばらくして、父さんの指輪は見あたらなくなった。母さんの薬指からも、父さんからはめてもらった指輪がなくなっていた。

母さんは、それをお金に換えて、取り立ての男たちに支払ったのだ。

アイは、くやしかった。家族の大切なきずなが、あんな男たちのために失われていくことが許せなかった。

そして、そのころから、母さんは、時々、胸を押さえて咳をするようになった。

咳をする回数は、ゆっくりと、しかし、月を追うごとに増えていった。母さん自身は、あまり気にとめていない様子だったが、アイはちがった。

アイは、ひそかに思っていたのだ。

（もしかして、母さん、やせた・・・？）

食糧事情が事情だけに、もともと、母さんもアイもやせてはいた。

けれども、母さんのやせ方には、ふつうとはちがうどこか病的な感じがあった。美しかっ

た顔も少しずつやつれて、十も歳をとってしまったかのようだった。

そんなある日、母さんは、工房で倒れたのだ。しかも、激しい咳とともに口から血を吐いて。

「母さん!母さんっ!母さんっ!」

あまりのことに恐怖にかられたアイは、母さんの背中をさすりながら悲鳴をあげた。

医者と呼べるような人間は、アイの周囲にはひとりもいなかったし、いたとしても診察に払うお金はなかった。

貧しさが、あらゆることを悪い方へ悪い方へと進行させていた。

近所の人たちが、何かと手を差し伸べてくれたが、ベッドで横たわるようになった母さんの容態は、いっこうに回復のきざしを見せなかった。

それどころか、日照りによってじわじわと井戸の水がかれていくように、悪化の一途をたどった。

ある夜、アイは、母さんの枕もとに呼ばれた。

死期を悟った母さんの顔は、深い悲しみに沈んでいた。自らの死への恐怖はもちろん、ひとり娘の行く末を考えると、いたたまれない思いだったにちがいない。

母さんは、枕もとにひざまずいたアイの髪を力なくなでながら、かすれた声で言った。

「ごめんね。母さん、あなたを残していかなければならないみたい・・・。でも、大丈夫。アイなら、きっとやっていけるから・・・」

「そんな、何言うの？母さんがいなくなったら、わたし生きていけない！」

アイは、ぽろぽろと涙をこぼしながら、母さんのもう一方の手を両手に包みこんだ。母さんの指は、元気なころとは比べものにならないくらい細く節くれだっていた。

そんなの無理だ。

父さんに続いて母さんまでいなくなるなんて、そんなの、わたし、耐えられない！

「いい？よくお聞き。母さんがいなくなっても、仕事は、市場の人たちから今までどおりもらえるはずよ・・・。たいしたかせぎにはならないと思うけど、アイひとりなら・・・、なんとか食べていけるわ。だから、苦しくても耐えてがんばるのよ・・・」

「だめよ、母さん！わたし、ひとりになっちゃったら、何にもできなくなる。自分でわかるの！」

アイが必死に訴えると、母さんは、目をやさしく細めて笑みを浮かべた。

「そんなことない。あなたは、強い子だから・・・。自分で思っているよりも、あなたは、ずっと強い子だから・・・」

「いやだ、母さんっ。いなくなっちゃ、いやだ！」

「大丈夫よ。大丈夫だから・・・」

それは、母さんが亡くなる前日の会話だった。

翌日の昼過ぎ、母さんの意識はなくなり、そのまま二度とアイと言葉を交わすことはなかった。

外は、ひどい雨だった。その雨がやんで、空に星々があらわれたころ、母さんは、急によみがえったかのように目を開けた。

まるく見開いた目でアイの顔をじっと見つめたが、意識があったかどうかはわからない。

母さんは、そのまま、大きな深呼吸を一回だけして、寝床に沈みこむように息を引き取った。アイにしっかりと手を握られながら。「母さん！母さんっ！」と、のどをからしてさけぶアイに、いつまでも見守られながら。

今、鏡の前で自分の姿をながめながら、アイは、あの悲しい日のできごとを思い出していた。

できあがったばかりの衣装を着て楽しくおどった分、悲しみが反動のように襲ってきた。

「わたし、何を浮かれているのかしら・・・」

アイは、ひとりつぶやいて、衣装を脱いだ。

これは、ナフィーサのものだ、わたしなんかが着るべきものではない。明日、いつものようにナフィーサのもとを訪れよう。すべては、そこからだ。

アイは、疲れ果てて寝床に入った。すぐに眠れるかと思ったが、頭がさえて、しばらくは寝つかれなかった。

窓から差しこむ月明かりだけが、背中をまるめた少女の体を、冷たく包みこむように照らしだしている。長く辛い夜が、ゆっくりと地をはうように時を刻んでいった。

六

短い夜が明け、目がさめても、アイの心には、夕べの悲しい気持ちがくすぶっていた。いつまでも落ちこんでいたところで、何がどうなるわけでもないことは、よくわかっていた。泣いていても、だれかがなぐさめてくれるわけではない。

アイは、天井を見上げたまま深く息を吸った。それから、「よし！」と声に出して勢いよくおき上がった。

元気だ！と自分に言い聞かせた。元気にならなければならない。

アイは、早い食事をすませ、さっそく例の鍵を持ってナフィーサのもとへ向かった。

あの日以来、兵士たちが、鍵がないとさわぐことは一度もなかった。やはり、落としたことに隊長が気づいていないのだ。

そして、今日は、兵士たちが来ない日。ジャンには悪い気がしたが、二人きりで鍵の相談をすることができないのでしかたがなかった。

アイが早朝を選んだのには、理由があった。この時間なら、まだ、多くの人々が眠りからさめていないため、ナフィーサをつれだしやすいからだ。

アイが小屋の前までたどり着くと、ナフィーサはすでにおきていて、こちらにいつもと変わらない笑みを向けた。

アイは、鍵を手にすると、やや緊張した面持ちで手錠をはずした。

重い手錠がはずれた時の気持ちのよさといったら、ずっと足の裏に刺さっていたトゲが、ポロリと抜け落ちたかのようだった。アイがそう感じるくらいだから、実際に手錠で鎖につながれていたナフィーサは、どれほどうれしかったことだろう。

ところが、ナフィーサは、手を引いて小屋から出ようとするアイに向かって、首を横にふった。

「えっ？どうして？」

アイは、意外に思った。ナフィーサは、なぜか、伏し目がちになってアイを引きとめようとするのだ。

「なぜ？行きたくないの？」

そうたずねると、ナフィーサは首を横にふった。

「やっぱり、行きたいんでしょ？」

今度は、コクンとうなずいた。それでも、アイが手を引いていこうとすると、ナフィーサは、それをこばんだ。

アイは、だんだん、ナフィーサの言おうとしていることがわかってきた。

ナフィーサは、アイのことを心配しているのだ。もしも、ナフィーサを別の場所へつれていったことが兵士たちにばれてしまったら、アイはひどい目にあわされるにちがいないからだ。

もちろん、それは、アイも承知している。承知はしていたが、それでも、鎖から解放されたナフィーサをどこかへつれて行ってあげたい、できることなら、人形らしく、たくさんの人たちから愛でてもらいたいという気持ちも強かった。

アイは、相反する二つの心に悩まされながらも、「だいじょうぶ、今日は兵士たちが来ない日だから」と、自分を鼓舞するように言った。

ナフィーサは、なかなか納得してくれなかったが、一歩も譲ろうとしないアイの勢いに押されて、ようやく、ゆっくりとした足どりで歩きだした。

はじめに向かうのは、アイの工房だ。まるで赤ん坊のように温かいナフィーサの手をにぎりながら、しだいに早足になって工房にたどり着くと、アイは、さっそく用意してあった衣装をナフィーサの前に広げた。

「あなたのために作ったのよ。今までの衣装だと、汚れちゃってるものね」

ナフィーサは、びっくりしたようだった。少なくとも、びっくりしたように目をまるくさせた。アイは、そんなナフィーサのちょっとした表情の変化が、うれしくてしかたない。

「ほら、着てみて。サイズがまちがっていないといいんだけど」

とまどっているナフィーサを急かして、アイは着がえを手伝ってあげた。新しい衣装を身につけたナフィーサは、見ちがえるように美しく、まるでどこかの国の姫君のようだ。

ナフィーサは、うれしい時にいつもそうするように、アイの肩に顔を近づけて喜びを表した。声に出せなくても、「ありがとう」と言っているのが、アイにはよくわかる。

「気に入ってもらえてよかった。さあ、これからお出かけしましょう」

アイは、背筋を伸ばして少しすましたように言うと、貴婦人に対するようなうやうやしい態度で再びナフィーサの手を引いて工房を出た。

いつもと同じ朝、いつもと同じ風景なのに、今日は、どこかちがって見えた。日の当たらないせまい路地や荒れはてた家々の裏庭など、ふだんは人目につきにくい場所までが、どこもかしこも輝いて、雨あがりのように、すがすがしさに満ちているのだ。

アイは、ナフィーサをつれていく先をあらかじめ決めておいた。雨上がりのあと、数週間にわたって続く絶景を見られる場所があるのだ。

本当は、せっかくきれいに着飾ったナフィーサをだれかに見てもらいたい気持ちが強かったのだが、いきなり、そんなことをして密告でもされたら、もとも子もない。

そこで、はじめは人目につきにくいところへナフィーサをつれだしてあげることからはじめようと、アイは考えたのだった。

ウルマス国は、もともと小高い山を利用して建設された都市国家だったから、中心にそびえ立つ王宮に向かってどこからも坂道が続いている。

道は、敵の侵入を食い止めるため複雑に入り組み、その道をおおいかくすように家々が建ちならんでいる。

だから、道を歩いていても大勢の人にいっぺんに顔を見られるという心配がほとんどないところが、今のアイにとっては都合がよかった。

アイの目指している場所は、ウルマス国の中心に近いところ、つまり、王宮の目と鼻の先にあった。

ただし、そこは王宮に裏表があるとしたら、どちらかと言えば裏にあたる、木々の生い茂った路地の一角にあったから、見まわりの兵士たちの目につきにくかった。

いや、兵士どころか、人がほとんど来ないのだ。

ここはアイの秘密の場所だった。ここからだと、城壁の向こうの世界が一望できる。つらいことがあった時や、なんとなく気持ちが乗らない時などに訪れると、胸のもやもやが晴れてすっきりする。

しかも、一年に一度の大雨のあとに現れる絶景をながめるには、これ以上適したところはほかになかった。

アイは、ナフィーサの手を取って、ゆっくりと工房から続く坂道を上っていった。途中、近くの井戸へ水くみに向かう二、三人の小さな子供たちと出くわしたが、何も問題はおこらなかった。

すれちがったあとに、アイがそっとふり返ると、見たこともないような美しいナフィーサの衣装に目をまるくさせている子供たちの姿があったけれど。

やがて、坂道が少しずつ急になり、そこを抜けたとたん、それまで頭の上をおおっていた建物の影がなくなり、太陽の光がまぶしく目に飛びこんできた。

そして、城壁の向こうに果てしなく続く、大地と水が織りなす不思議な情景が、二人の目

の前にひろがった。

「うわあ、ほら、見て！ナフィーサ、これを見せたかったんだよ！」

アイは、朝までの憂うつな気持ちもすっかり忘れて、思わずさけんだ。

彼女の指さした先にあるもの。それは、大雨が砂漠に作りだした、大小さまざまな湖の群れだった。鏡のようにさざ波ひとつ立たないそれぞれの湖面に、ひっくり返った青い空と太陽が映っている。

「まるで、空にいる神様の鏡みたい。大きな大きな、何もかも映してくれる鏡！」

アイのはずんだ様子に、ナフィーサは、ただニコニコとほほ笑んでいた。

薄暗い城壁のたもとから、澄みわたる青空の下におどり出たナフィーサの顔は、人形であることを疑ってしまうほど、生き生きとしている。

砂漠にできた幻想的な湖も美しいが、輝くようなナフィーサの笑顔は、それ以上の美しさだ。

「こっちよ、ナフィーサ。こっちには、草花もある」

アイが招いたのは、路地のすみにある空き地だった。昔は家があったはずだったが、何年も前に取り壊されて、それからずっとそのままになっている。

けれども、その王宮の庭のような空き地には、一年の多くの時期で色とりどりの花が咲き、アイの目を楽しませてくれた。だれかが、手入れをしているようなのだ。

そのだれかをアイは見たことがなかったが、きっと、この落ち着いた庭にふさわしいやさ

しい心の持ち主なのだろう。

アイは、そう思っていた。食べることすらままならないこのつらい時代に、美しいものを愛でる心を持った人がいる。

そのことは、アイの空想をかきたてた。あこがれと言ってもいいかもしれない。

「世界には、こんなにすばらしいものがあるのね。夢を見ているみたい」

空き地のまん中にたたずんで地平のかなたへ目をやりながら、アイは、ひとり言のように言った。それから、クスッとふきだした。

ナフィーサが「どうしたの？」という顔を向けたので、アイは、笑いながら「ごめん！」と言って両手を口の前に組んだ。この地域のあやまる時のしぐさだった。

「急におかしくなっちゃった。本当のこと言うと、今朝まで、ちょっと落ちこんでたの。それがバカみたいに思えて」

「・・・・・」

「昔、父さんから海の話を聞いたことがあるの。わたしは、まだ見たことがないけど、きっと、こんな感じなんじゃないかしら？そこでは、お日さまもお月さまも、水の中から生まれて水の中に沈んでいくって聞いたわ。見てみたいなあ、そんな世界」

たしかに、城壁の向こうに点在する湖は、高みの大地と大地の間を閉ざすようにどこまでも続き、湖と言うには、あまりにも大きく広がりすぎている。まるで、海のようだ。

アイは、自分の言ったことが照れくさくなって、ますます笑いだした。

「アハハハ・・・、今日のわたしって、どこかの詩人のようだと思わない？気取りすぎかしら？」

「・・・・・・」

ナフィーサは、その木でできているはずのほほにアイと同じ笑くぼを作りながら、首を横にふった。

すると、そんなナフィーサのしぐさにあわせたかのように、人の声がした。

「そんなことはない。おまえの言うことは、よくわかる。おれも、ずっと海を見たいと願ってきた・・・」

突然、背後から声をかけられて、アイは背筋がしびれるほどびっくりした。まさか、この場に自分たち以外に人間がいたとは！

「すまない、驚かせてしまったな。立ち聞きをするつもりはなかったが、かつてのわが家があった場所に来てみたら、おまえたちがいたのでな」

ふり返ったアイの目に飛びこんできたのは、彼女よりはだいぶ年上だが、まだまだ若く灰色の髪をしたひとりの兵士だった。

だが、ただの兵士ではない。身に着けているものから見ても、かなり上位の身分を持つ男のようだ。

「す、すいません。ここが、あなたの家だとは知らなかったものですから・・」

アイは、緊張のあまり、ふるえる声で男にあやまった。

まずい！この男にナフィ―サの正体がばれてしまったら、大変なことになる！

けれども、男は、ナフィ―サのことを気にするふうでもなく、城壁の向こうをながめながら言った。

「おれの話を聞いていなかったのか。ここは、『かつて』わが家があったところだ。時々、ここへ来て思いにふけるのは好きだがな」

アイは、できるだけ男にナフィ―サを見せないよう、彼女の姿がかくれる位置に自分の体をさりげなく移した。ナフィ―サの頭に、ヴェ―ルがかけられていることも幸いした。

「たしかにすばらしい光景だな。あの丘がなければ」

男は、そう言って、城壁の向こうにひときわ目立つ、丘と言うには険しすぎる高地にあごをしゃくった。

「あれは、太陽の丘と呼ばれているものだ。聞いたことはないか？あの丘にまつわる忌まわしい歴史を。あそこには、太陽などない。光も希望もない。あるのは、悲しき者たちの無念の悲鳴だけだ」

アイは、返す言葉もなく、男の見つめる先に視線をあわせた。

太陽の丘という言葉は、昔、母さんから聞いたことがある。詳しくは話してくれなかったが、母さんは、その存在をとても忌みきらっていた。

「知らなければ、そのほうがいい。おまえ、ここにはよく来るのか？」

「はい、時々ですが・・・」

「そうか、おれ以外に、この場所を好む者がいるとは知らなかった。おまえ、名は何という？」

「・・・アイ。アイといいます」

アイは、答えてしまってから、別の名前にしておけばよかったと後悔した。こういう正直すぎるところが、自分でも時々いやになる。

「アイ・・・。月という意味か。よい名だな」

男は、ポツリとつぶやくように言ったが、それ以上、アイのことを探るようなまねはしなかった。

「おれの名は、アルロスだ。こんななりをしているからといって、こわがることはない。ここには、好きに来るがいい。そちらの娘もな」

アルロスからうながされて、ナフィーサは、スカートのすそをつまんで軽く会釈をした。

それを見て小さくうなずいたアルロスは、そのまま、ナフィーサの正体に気づくことなく王宮の方へと立ち去っていった。

やはり、王宮から来た軍人なのだ。それも、その話しぶりや歩き方などから、いつもアイを怒鳴りつけているような兵士たちとは、まるで身分がちがう人のように見える。

アイは、危うくよろけそうになるところだった。

よかった・・・。ナフィーサにあれこれ話しかけられずにすんで、本当によかった。

アイは、額に浮かんだ冷や汗を手の甲でぬぐうと、ナフィーサに「帰ろう」と呼びかけた。

今日は、ここまでだ。あまり、無理をすると、またアルロスのような人物に出会わないと

もかぎらない。

でも、こんなふうに兵士たちの目を盗んでナフィーサをつれだすことは、危険もあるが、不可能ではないとアイは思った。

なぜなら、もとの黒い衣装に着せ替えて、再びナフィーサを小屋に帰した時も、見張りの兵士たちに気づかれた様子は、まったくなかったからだ。

どういう理由かはわからないが、兵士たちは皆、必要以上にナフィーサと関わりを持つのを恐れている。任務がない時に、わざわざ彼女の様子を見まわりに来ることはしたくないらしい。ジャンが言っていたとおりだ。

それにしても、あのアルロスという男、軍人にしてはごう慢な態度が少しもなかった。いったい、何者だろう？王宮にいる貴族のひとりだろうか？男のくせに、首からかけた真珠の飾りにだけは、なんとなく違和感があったが。

あの草花の咲き乱れる美しい庭のかつての持ち主が、王宮に出入りする軍人だとは思ってもみなかったから、かなり意外な感じがした。軍人にも、色々いるのだ。

いずれにしても、もうあそこへ行くのは危険だとアイは思った。お気に入りの場所を失って残念だが、しかたがなかった。

七

ウルマス王ルベルタ四世は、弱りきっていた。

体のいたるところから力が抜け、痛みと途方もない疲れを感じはじめたのは、なにも今日や昨日のことではない。

この体の不調が、体の病によるものなのか、心の病によるものなのか、自分でもはっきりとはわからなかった。

目の前の来訪者を見つめる王の目に、かつて宿っていた猛々しい光や、慈愛に満ちた輝きは少しも残っていなかった。

「・・・それで、貴殿の将軍閣下におかれては、われらに何をお望みか？かいつまんで話していただきたい」

王のそばにひかえていた若い将校が、玉座の前方に片ひざをついて頭をたれている異国の使いに向かって言った。

異国の使いとは、西軍の前衛部隊から派遣されてきた使者である。

使者は、西洋式の作法にのっとり王への礼を尽くしていたが、これは、ルベルタ四世にとっては、はなはだ心外なものだった。ウルマス国の礼に従うならば、王に対しては両ひざをつくべきところなのである。

「わが主の望みは、貴国との間に融和の道を築きたいという一点に尽きます。おりしも、東軍の兵がこちらに向かって進軍している今、われらともどもに手を取りあい、共通の脅威に対して事をかまえるべきではございませぬか？」

使者は、赤ひげをたくわえた四十がらみのさえない風体をしていたが、その弁舌にだけは、

聞く者を魅了する力を持っていた。

玉座の左右に直立していた、大将をはじめとする古参の上級士官たちの中から、待っていたかのように問いかけがあがった。

「手を取りあうと申されたが、貴殿は、このウルマス国に何をもたらせてくれるというのだ。率直にお教え願いたい」

使者は、即座に答えた。

「一万の将兵。それに見あう武器と食料。食料に関しては、貴国にも多く利するだけのものをお届けいたしましょう」

「一万の将兵！それに、食料とな！」

質問をぶつけた上級士官は、百戦錬磨の老中将だったが、多少大げさに聞こえなくもない程度の驚きようで使者の言葉をくり返した。

「聞かれましたかな？一万の将兵ですぞ。一万の将兵が味方してくれれば、神聖なる陛下の王国を守るに十分ではありますまいか？」

上級士官たちの間に動揺が広がったのは、たしかだった。賛同の者と、そうでない者と。

そうでない方の体格のよい壮年の中将が、老中将に横槍を入れた。

「一万の将兵に驚かれるとは片腹痛い。貴殿もご承知のとおり、東軍は一万五千の兵を援軍としてこちらに差し向けると、使者からの申し出があったではないか」

すると、すぐさま西軍の使者がつけ加えた。

「二万！」

まるで、場内を威圧するかのような言いようだった。

「わが方にお味方くだされば、二万の将兵を差し向けましょう。いや、先方が二万五千と言えば三万。三万と言うなら三万五千の兵を用意いたします」

つまり、何が何でも東軍の提示した条件を上回ってみせるというのである。

賛同の老中将は、満足そうな笑みを浮かべ、反対の壮年の中将は、舌打ちをして不機嫌な顔になった。

ここに東軍の使者が同席していたなら、議論は、ただの水かけ論になったことだろう。

上級士官たちは、騒然となったが、その場にいた彼らのすべてが、結局は、東軍にくみする者か西軍にくみする者かのどちらかでしかなかった。

「もうよい・・・」

議論が白熱し怒号が飛び交う中、王の声が低く響いた。

「もうよいと言っているではないか」

はじめの若い将校が、それを受けて声をはりあげた。

「王のお言葉です。皆、お静かに！」

とたんに、あたりは水を打ったようにしんと静まり返った。

立ち上がって自軍の主張を訴えていた西軍の使者は、やや気後れしたように再び片ひざをつき、神妙な面持ちで頭をたれた。

上級士官たちも、荒い鼻息を押し殺しながら、直立の姿勢に戻った。

「そなたの申し出はわかった。善処する・・・」

王の言葉は、ただこの一言だけだった。これは、東軍の使者が来た時とまったく同じだった。

西軍の使者は、一瞬、鋭い視線をルベルタ四世に走らせたが、その後は、おずおずと一礼して王の間から退出した。

上級士官たちは、眉間にしわを寄せて、明らかな失望をその表情に浮かべた。

「陛下の前での言い争いは、厳に慎んでいただきたい。ましてや、今は西軍の使者も同席してのこと。こちらの内情を敵陣に知らせていかがするおつもりか?」

若い将校は、その若さに見あわない威厳に満ちた調子で言った。上級士官たちの目に、もう何度もくり返されてきたであろう反発の色が示されたが、口答えをする者はいなかった。

ルベルタ四世は、まぶたを閉じながら片手で空を払って、王の間から下がるよう上級士官たちにうながした。

こうして、軍議は、議論が煮え切らないまま散会となった。

「あの小僧め、われこそ陛下の右腕と言わんばかりの態度をしよって。平民出の分際で生意気もはなはだしい!」

そんな声が、先ほどの老中将からもれた。もちろん、声を押し殺してはいるが、わざと聞こえるように。

「まったくだ。あの青二才のせいで、このまま東軍とも西軍とも和議が結べないとなれば、われらに生きる道は残されてないぞ」

老中将と意見が対立していたはずの壮年の中将も、話をあわせた。

「陛下は、いかがなさるおつもりであろうか？」

「もう、時間がない。一刻も早くご判断いただかなければならないというのに」

「これも、あの若造のせいだ。あやつが、陛下に取り入って甘言を吹きこんでいるからだ」

そのほかの上級士官たちも、口々に不平をならべ立てた。

全員が、東軍か西軍のどちらかにくみしながら、共通の敵はただひとり、ルベルタ四世のかたわらにいつも侍っている若い将校だった。

こうした状況が、もう一年も続いている。ルベルタ四世の命によって、新旧の側近の立場が入れ替わった一年前から。

若い将校は、彼らのうしろ姿に目をやりながら、その表情は冷めきっていた。

「兄者。陛下が・・・」

兄者と呼ばれた若い将校に声をかけたのは、そのうしろにずっとひかえていた、もうひとりの若く屈強な体格をした大男だった。名をジ―ミナスという。

そして、彼の声にふり返ったのは、王宮近くにある庭でアイやナフィ―サが出会った男、アルロスだった。

アルロスは、両ひざを床につくと、ルベルタ四世の前に頭をたれて言った。

「陛下、お許しください。お見苦しいものをお見せいたしました」

「気にせんでよい。気にせんでな・・・」

「皆、東軍西軍いずれかと手を結ぶことを考えております。その後におこるであろう、彼らによる侵略の悲劇のことは無視して、夢を見ているのです」

ルベルタ四世は、血の気のない顔に苦渋の表情を浮かべて、うめくような声をもらした。

実際の年齢より、ずっと老けて見える顔立ちをしている。ルベルタ四世は、まだ還暦を迎えたばかりだったが、その容姿は、八十歳を過ぎた翁のようだった。

「だから、わしは、やつらを遠ざけおまえを侍従の要とした。その意味はわかるな？」

「はい、心得ているつもりです」

「このウルマス国を残す手立てを考えよ。東軍にも西軍にもくみしない別の方法でな」

ルベルタ四世は、そこで激しく咳きこんだ。

王とは名ばかり、国の内と外に難問を抱え、側近にはいつ寝首をかかれるかわからない。そんな年月を長く過ごしてきた彼の体は、心身ともに病に冒されていた。

そもそも、東軍にも西軍にもくみしない別の方法があれば、苦労はなかった。そんな無理難題をアルロスに吹っかけているところからして、ルベルタ四世の心の病は重いと言えた。

ジ―ミナスが侍女を呼び、王を寝室につれていくよう指示した。王の間には、この国の行く末を託された二人の将校だけが残った。

「われらも、引き上げるぞ。こうしている間にも、上級士官たちが、何かを企てないともか

ぎらないからな」

「はっ！」

二人は、歩きだしながら周囲に目を配った。どこでだれが聞き耳を立てているかわからないから、こうすることがくせになってしまっていた。

「おまえは、どう考えているんだ？」

「おれの意見など・・・」

アルロスの問いに、ジ―ミナスは少し声を落とした。

「遠慮はいらん。いいから、思っていることを正直に言ってみろ」

二人は、言葉を交わしながら、王宮の見晴台へと出た。ところどころに灯されたたいまつの明かり以外に見えるのは、満天の星空だけ。

しかし、地平線へと続く暗闇のかなたには、今この時も、ウルマス国をねらう無数の軍勢が、たしかにうごめいているはずなのだ。

「上級士官たちの背後には、すでに明確な形で東西両軍のいずれかがついています」

ジ―ミナスは、単刀直入に言った。

「つまり、各上級士官とも、敵の使者と密会を重ねているというのか？」

「おそらく、さまざまな権謀術数をめぐらせているのでしょう。自分さえ生き残れば、国とその民がどうなってもかまわないと考えている連中です」

「ずいぶん、はっきり言うな」

「ですから、おれの意見などと申し上げたのです」

これを聞いて、アルロスは声を立てて笑った。

「よい。それでよい。おまえが、おれと同じ認識を持っていてくれて安心したよ」

「恐れ入ります」

ジ―ミナスも白い歯を見せたが、この国が抱えている現実を考えると、心から笑うというにはほど遠いものにしかならなかった。

この若い二人の将校は、本物の兄弟と呼んでも過言ではないほどの強い絆で結ばれていた。

同じ平民出という身分がそうさせていた部分もあるが、それ以上に、ジ―ミナスは、上級士官でありながら、自らを飾らないアルロスの気質にほれていた。彼は、けっして出自や経歴などで人を差別しない。

そして、アルロスの生きる目的が、十年以上前のある事件をきっかけとしていることも、ジ―ミナスは、知っていた。

今日という日まで、アルロスは、おのれの胸に秘めた目的を達成するためだけに、貪欲に生きてきたのだ。復讐という目的を遂げるためだけに。

「やはり、兄者は、状況打開の方法はひとつしかないとお考えですか？」

ジ―ミナスの問いに、アルロスは一瞬しぶい顔を見せたが、おのれを鼓舞するかのようにきっぱりと答えた。

「この国に迫り来る、東西両陣営あわせて二十万の軍勢をたたく方法が、ほかにあるだろう

か?ウルマスの黒人形を使うという以外に・・・?」

もう何度もこの会話をくり返してきたはずなのに、アルロスは、うずくような胸の痛みをおぼえた。

ウルマスの黒人形。

それは、今から三十年以上も昔に作られた、古い神々にささげるための生けにえの人形。この生けにえという風習を、彼は、どれほど憎んできたことだろう。

ところが、今、途方もない強大な敵を前にして、人形とはいえ、その生けにえに頼る以外、自分たちにできることが何もないとは・・・。

「黒人形を、早めに城壁のうちへ戻しておいて正解だった。もっとも、役人どもには、ずいぶん反対されたがな。本来なら、戦がはじまるまで、王宮内で保管しておくべきなのだろうが」

「兄者は、黒人形によって、本当に何かがおこると信じておられるのですか?」

「おまえも知っているだろう?おれが、古い迷信など信じない男だということを」

アルロスが肩をすくめて見せたので、ジ―ミナスは、ますますたずねてみたくなった。

「では、なぜ、黒人形にこだわるのです?」

これを聞いたアルロスは、もう何度も同じ問いを自身に投げかけてきた人のように、軽く頭をふってため息をついた。

「歴史が残っているからだ。黒人形によって、多くの悲劇がもたらされたという歴史がな。

これは、否定しようのない事実だ。おまえも、その目で見たはずだ。あの、生きているかのような人形を」

アルロスは、一面の闇を遠くながめるような目をして言った。

その横顔に目をやるジ―ミナスは、アルロスの表情には、皮肉めいた笑いがかくされていると思った。

笑っている。これからおこる悲劇を前にして、このお方は、まちがいなくほくそ笑んでおられる。

「あれは、この世のものではない。いかなる兵力も権力も、黒人形がもたらす災厄の前には無力だ」

「神・・・ということですか?」

「神と言うより、ウルマスの民にとっては、恐怖の対象でしかないだろう。人は、不可思議なものを目にした時、それが、自分たちに危害を及ぼすものでなければ、信仰の対象としてあがめるが、そうでない場合は、恐怖しか抱かなくなる。王族、貴族、役人どもも、たたりを恐れて手出しができない。あげくの果ては、城外に放置して、自然にこわれるのを待つというありさまさ」

アルロスは、そこで本当に、腹に何かを含んだ笑みをクツクツともらした。そして、言った。

「ジ―ミナスよ。これからおこることは、ウルマス国の歴史に長く残ることになるかもしれ

ない。いや、残らないかな?もしも、この国がなくなってしまえば、敗者の歴史などすべて闇に葬られることになるからな」

ジ―ミナスは、うなずいた。

「いずれにしても、おれは、兄者についていくのみです。それが、義兄弟の契りを交わしたおれの役目ですから」

アルロスは、自分より一歩うしろにいるジ―ミナスをふり返った。ジ―ミナスは、微動だにせず、自分にとって一生の上官と決めた男の目に視線をあわせた。

アルロスという男の信念は、たとえ天地がひっくり返るような事態がおこったとしても、けっしてゆらぐことはないだろう。

おのれの命を犠牲にしても、彼の復讐への執念は、途絶えることのない火山の炎のように、常に燃え続けているからだ。

八

アルロスが、町医者のア―ゼル家につれてこられたのは、彼がまだ五歳のころのことだった。

正直、そこにいたるまでの記憶は、はっきりしない。気がつけば、彼は孤児だった。

わずかにおぼえているのは、母の顔だけで、その母の死が、彼の運命を劇的に変えることになったのだが、詳しいいきさつは、今もってわかっていない。残っているのは、母に抱か

れていた時の温もりの感触だけである。

「お父さん、この子はだれ？どうして、うちへつれてきたの？」

ア―ゼル家のひとり娘レイナは、アルロスよりひとつ年下だったが、突然やってきたもうひとりの家族に興味しんしんだった。

なぜ、父親が孤児を引き取ってきたのか、くわしい事情は知る由もなかったが、レイナは、身なりは貧しくとも、やさしい目をしたアルロスのことが、すぐに気に入ってしまった。

一方のアルロスは、そんなレイナを前に、はじめのうちこそとまどっていたが、それも、ひと月かふた月ほどの間だけだった。

毎日、同じ時間に食卓をかこみ、同じ時間に寝床にもぐりこむ生活が過ぎていくにつれて、アルロスは、人なつっこいレイナを本当の妹のようにかわいがり、ともすれば近所の悪童たちからいじめられそうになる小柄な彼女の盾となってあげたりした。

アルロスの出生については、とうとう謎のままだったが、彼には、持って生まれた気品というか気高さのようなものが備わっていた。

アルロスは、幼いころから軍人になる夢を持っていた。軍人が優遇されているこの国では、少年ならだれでもそれを願うものだった。

父親代わりとなったア―ゼルは、軍人よりも自分と同じ医師になるようアルロスに求めたが、それは、無理な要求だった。

しきたりの厳しいア―ゼル家を一歩飛び出せば、アルロスは、その無鉄砲な才能の一端を

たちまちのうちに開花させた。彼は、けっして屈強な体格をしているわけではなかったが、運動なら何をやらせても、常にいちばんだった。

その上、機転がきき物おぼえもよかったから、周囲の者は、アルロスに一目置かざるをえなかった。貴族の子供たちですら、彼の前では、影が薄くなった。

そして、時が過ぎ十四歳になると、アルロスはかねてから希望していた騎士学校に入学した。

騎士学校の食事が、庶民のレベルからみればずいぶん恵まれていたことで、アルロスの体格はみるみるよくなっていった。

それにともない運動能力もさらに向上し、剣術の腕前も格闘術の技の切れも、教員にさえ負けないまでに上達していった。

レイナのアルロスを見る目に、恥じらいの感情が混じりはじめたのは、アルロスが騎士学校に通うようになってから一年が過ぎたころのことだった。

アルロスも、そんなレイナの視線を意識するようになり、彼女の清楚な美しさにひかれるようになった。

二人は、幼いころにはなかったときめきを胸に抱きながら、何時間もおしゃべりに夢中になった。

ある時は、人目のない裏庭のベンチに腰かけ、白い陽光に照らされながら、そっと手をふれあったこともある。

十四歳の誕生日を迎えたレイナは、青いひとみをした、周囲がうらやむほどの美しい女性に成長していた。

今や、堂々としたたくましい騎士候補となったアルロスとは、だれの目から見てもお似あいだと思われた。

もちろん、アーゼルがそんな二人の変化に気づかないはずがない。実は、アーゼルは、正式にアルロスを自分の養子にしていたわけではなかった。

アーゼルは、アルロスがあと一年で騎士学校を卒業するという時になって、彼に伝えた。

「アルロスよ、おまえもあと一年で騎士学校の課程を終える。そうしたら、レイナといっしょにならないか？わたしたちは、本当の親子になるんだ」

このアーゼルの言葉を、アルロスは、どれだけうれしいと思ったことだろう。

アーゼルは、レイナにも同じ話を伝え、まだ幼さを少し残すほど若い二人は、一年後には結婚することになった。

一年たったら、愛するレイナをこの腕で抱きしめることができる。アルロスの胸は、躍った。そう、たった一年後のはずだった。

ところが、アルロスの願いがかなえられることはなかった。

その年は、ひどい凶作で、人々は例年以上の飢えに苦しんでいた。飢餓がはびこると、為政者の権力構造に変化が現れるのは、洋の東西を問わず今も昔も同じだった。

もともと、権力基盤の弱かったウルマス王ルベルタ四世も例外ではなかった。

しかも、王にとってさらに悲劇だったのは、唯一の子息であったアチル王子が、わずか七歳で突然死したことだった。

原因は、わからなかった。毒を飲まされたのではないかというううわさもあったが、うわさの域を出ることはなかった。

だが、本当の悲劇はここからだった。

ウルマス国の後継者となるアチル王子が死んだことで、世情はさらに乱れた。ルベルタ四世は嘆き悲しみ、天の神々に生けにえをささげて、悲劇の連鎖を食い止めるよう臣下に命じたのだ。

生けにえとなる多くの若い娘が、強制的に集められた。このころから、ルベルタ四世の言うことには、一貫性がなくなっていた。彼は、王子を失った心痛のあまり、急激な心の病に冒されはじめていたのだった。

罪のない若い娘たちは、皆、平民の出身だった。そして、あろうことか、その中にはレイナの姿もあったのだ。

レイナは、突然、家に押し入ってきた役人たちにつれ去られた。騎士学校にいたアルロスが知らせを受けて家にかけつけた時には、すでにレイナはいなくなっていた。

泣きくずれているア―ゼル夫妻をはげまし、アルロスは、すぐに王宮の役人にかけあった。

だが、平民出の軍人に発言する権利などなかった。何を訴えても、平民というだけで話を聞いてもらえない。

アルロスは、歯がみをする思いだった。大切なレイナが、寒々とした鉄格子の向こうで、ほかの娘たちと肩を寄せあって悲しみにくれている姿を想像するのは、胸をかきむしられるほどの苦しみだった。

アルロスは、あらゆる手を尽くした。さまざまな人脈を頼り、金を使い、それでも無理なら剣による脅しをかけ、レイナを救い出すことに躍起になった。

しかし、何をどうしようが、一度決定したウルマス王の命を変えることはできなかった。

ついに、アルロスは、強硬手段に出るしかなくなった。捕らわれのレイナを救い出し、ウルマス国から脱出しようとしたのだ。

もちろん、そんなことをすれば、両親も無事ではすまされない。こうなれば、全員がつれだって、国の外へ逃げるしか方法はなかった。

九

月のない暗いある夜、アルロスは、可能なかぎりの武器を身につけ王宮の地下にある牢獄へ忍びこんだ。

見つかれば、即死刑だ。アルロスは、顔を布で巻き、目もと以外は見えないようにした。服装も、異国の隊商が着ているようなボロをまとい、正体をわからなくした。

アルロスは、捕らわれとなっている娘全員を逃がすつもりでいた。

どの娘にも生けにえとなるいわれなどないというのもあったが、レイナだけでなく全員を

救出すれば、役人たちに、自分が犯人だと気づかれるまでに時間がかせげるという思惑もあった。

だが、牢獄の警備は、彼が予想していたよりもはるかに厳重だった。通常の倍の番人が要所を警備していたため、なかなかレイナが閉じこめられている牢獄まで近づけない。

アルロスは、足音もなく番人のひとりひとりに背後から近づき、声を立てさせないように気絶させていった。そして、それぞれの番人から牢獄の鍵をうばい、それと思しき錠にあわせていった。

生けにえのために拉致された娘たちは、何人かに分けられて牢獄に入れられていたが、得体の知れない侵入者の登場にすっかりおびえていた。

が、それもわずかな間のこと、思いもかけず牢獄から逃げられるとあって、娘たちは、われ先に外へ飛び出した。

「あわてるな！見つかっては、何にもならぬぞ」

アルロスは、感情の高ぶっている娘たちをなだめるのにも気を配らなければならなかった。

それから、ようやくレイナのいる牢獄にたどり着いた。

「アルロス！」

顔の布を取り素顔を見せたアルロスを前にして、レイナは、思わず声をあげた。まさか、アルロスが助けに来てくれるとは思いもよらなかったからだ。

「レイナ、無事か？待っていろ、今、開けてやる」

アルロスは、周囲に警戒しながら鉄格子の鍵を外した。

冷たい牢獄から解放されたレイナは、アルロスとかたく抱きしめあった。

「早くここから出よう。みんなで行くんだ」

アルロスはそう言ったが、生けにえに選ばれた娘の人数は、想像以上に多く、自分だけで守るにはあまりにも無理があった。

牢獄の異変は、すぐに上の者に知れることとなった。たちまち、牢獄のいたるところに明かりが灯され、王宮は、大さわぎになった。

アルロスは、かけつけてきた兵士たちと、剣を抜いて戦わざるをえなくなった。またたく間に、何人もの娘たちをうばい返された。

とはいえ、大切な生けにえなので、兵士たちは、娘たちを捕らえることはあっても、その場で殺してしまうようなことはしなかった。

「おのれ！おれとレイナだけなら、むだな戦いを避けて突破できるのだが・・・」

次々に襲いかかってくる増援の兵士に、アルロスはうめいた。彼は、しっかりとレイナを抱きかかえて、追ってくる敵に応戦し続けたが、さすがに、自分の限界と作戦のあまさを痛感した。

その時だった。

アルロスとレイナの背後に、不意に人の気配がした。ふり返れば、さっき気絶させたはずの番人のひとりが剣をかまえて突進してくる。

しまった!とアルロスが剣をかまえた時には、相手の剣先が、すでに彼ののどもとを突こうとしていた。

「やめてっ!」

悲鳴をあげて番人のふところに飛びこんだのは、なんとレイナだった。

番人は、レイナの勢いに押されてひっくり返りそうになったが、かろうじて体勢を立て直し目の前のじゃま者を突き飛ばした。そして、そのまま胸を剣で突き刺したのだ!

「うっ・・・」という短い悲鳴とともに、レイナの体は、花びらが舞い散るようにくずれ落ちた。

「レイナッ!」

アルロスの絶叫が、せまい通路に響きわたった。

彼の剣は、阿修羅のような怒りとともにふり上げられ、そのまま、番人の体を肩からまっ二つに切り裂いた。

アルロスは、倒れているレイナの前にひざまずき、その血まみれの体を抱きおこした。

「レイナ!しっかりしろ、レイナ!傷は浅いぞ!」

しかし、そんな言葉とは裏腹に、剣術に秀でたアルロスには、ことの重大さが見えてしまっていた。

「アルロス、わたし、あなたを助けたくて・・・」

レイナは、アルロスに抱かれたまま笑顔を浮かべようとしたが、そのとたん、口から血が

あふれ出た。

「わかっている。わかっているよ」

アルロスは、レイナの手を握りしめながら、その髪をやさしくなでてあげた。

「アルロス、こんなことになってしまってごめんなさい・・・。あなたが騎士学校から帰ってきたら、あなたの好きなものをいっぱい作ってあげるつもりだったのに・・・」

アルロスは、目にいっぱい涙をためて、レイナに笑いかけた。

「何を言ってるんだい。二人で家に帰るんだよ。大丈夫、ぼくがつれていってあげるからね」

レイナは、アルロスの言葉を聞いて、血のついたほほに笑くぼを浮かべた。感情の高ぶりが呼吸を荒くさせ、彼女は何度も咳きこんだ。

「ありがとう、アルロス・・・。大好きよ・・・。あなたのことが、本当に大好きよ・・・」

「ぼくもだよ、レイナ。だから、生きておくれ。ぼくのお嫁さんになってくれるって約束したじゃないか」

アルロスの涙が、薄く汗ばんだレイナの額に落ちた。レイナの目からも、涙がせきを切ったようにあふれ出たが、彼女は笑みを絶やさなかった。

「そう、約束よ・・・。わたしにはあなただけ。あなたしかいないの」

「レイナ!死なせはしないよ、レイナ!」

「約束よ。大好きなアルロス、約束よ・・・」

アルロスは、最愛の人の死を、瞬きもせずに見届けた。

汚れのない素朴な幸せを求めていただけのレイナに、なぜ、こんなにもむごい仕打ちが待っていたのだろうか。

アルロスは、泣いていたはずだった。気が狂いそうな悲しみに胸をかきむしられながら、大声で泣いていたはずだった。

しかし、彼の記憶は、ここからしばらく途切れている。ただ、さらに追い討ちをかけてきた兵士たちを、悪魔のような冷酷さで皆殺しにしていったことだけが、彼の脳裏の片隅に残っているだけだった。

気がつけば、アルロスは返り血にまっ赤に染まりながら、闇の中、家にたどり着いていた。

アルロスの手に握られた真珠の首飾り以外、レイナの形見となるものは何も残っていなかった。激しい戦いの中、レイナの亡きがらをつれ帰ることはできなかったのだ。

この世にこんな悲しみがあるだろうかと、アルロスは思った。彼は、ありし日のレイナを思い、ひたすら涙を流し続けるばかりだった。

ア―ゼル夫妻も、あまりの心痛に、満足にしゃべることすらできないありさまになってしまった。大切に育ててきたひとり娘を失った苦しみは、この世のどんな痛みにも例えることができなかった。

アルロスたちは、希望を失った。明るい喜びに満ちていたはずの未来を、何もかも一度に失ったのだった。

あれから、ずいぶん長い年月が過ぎた。

アルロスは、今やルベルタ四世の側近の要の地位にある。

レイナの命が失われてからというもの、アルロスの胸の内にあるものは、ただ復讐の思いだけだった。

レイナを生けにえにしようとした、ルベルタ四世への復讐。罪のない若い娘を生けにえにするという、古い蛮民が作り上げた悪しき風習への復讐。そして、生けにえを欲していると言われる神々への復讐である。

アルロスは、騎士学校を卒業し兵役の任務につくと、めまぐるしい勢いで頭角を現していった。そして、そうした中で、彼は、ジ―ミナスというかけがえのない友と出会った。

二人のもとには、アルロスの秀でた才能と人格に魅了された、平民出の優秀な兵士たちが続々と集まってきた。

彼らの、退却という言葉を捨て去ったかのような勇猛果敢な戦いぶりは、ほかの上級士官たちの部隊を圧倒した。わずかな兵力だけで、東軍や西軍の軍勢を追い払ったことも、一度や二度ではなかった。

結果が、すべての世界である。たとえ平民出であろうと、強い者がのし上がるのが古今東西の軍隊のおきてだった。

それに、アチル王子の死が、いずれかの上級士官の手引きによるものとの疑いがあったことも、彼らに幸いした。

アルロスが目指してきたもの。

それは、ルベルタ四世の側近となって、その命と権力と財力のすべてを奪い取ることだった。ルベルタ四世の命によって自分が失ったものを考えれば、それくらいは当然だと思えた。

それなのに、彼は、いまだルベルタ四世を殺害するにはいたっていない。なぜか？

アルロスは、ルベルタ四世を、おのれのためならほかの犠牲をかえりみない、非情な男だと思っていた。

事実、アチル王子の死に報いるために、多くの生けにえを要求したことからも、彼の暴君ぶりがうかがえる。

だが、実際に目にしたルベルタ四世は、かけがえのないひとり息子の死を嘆き、王国に降りかかる災厄に恐れおののく臆病な老人にすぎなかった。

彼は、自分自身の死にも恐れを抱いていた。これまでさんざん生けにえを求めてきたくせに、今度は、その業により自分が地獄に落ちるのではないかと疑っているのだ。

アルロスは、そんなルベルタ四世の姿に、殺す価値すら見出せなくなってしまった。

王国は、その中枢も荒れていた。あと継ぎであるアチル王子がいなくなったことで、貴族たちの間の権力闘争が激化していた。

ルベルタ四世の命は、アルロスが手を下すまでもなく、風前の灯と言ってよかったのだ。

それに、将校の地位を手に入れてから見えてきたのは、むしろ、自分と同じ貧しい生活の中でつつましく暮らしている民の姿だった。

もとより、アルロスも、こうした民にまで危害が及ぶのを望んでいるわけではなかった。

今、ルベルタ四世の命を奪えば、王国はさらに乱れ、そのしわ寄せは、弱者である民におよぶことになる。

アルロスは、復讐よりも民の生活を再建させることのほうが重要であると、悟らざるをえなかった。

もちろん、彼の内に潜むうらみと後悔の思いは、けっしてなくなることはなかった。

レイナが無残な死を遂げてからしばらくすると、聡明な医師であったアーゼルに異変が現れはじめた。それからすぐに、夫人にも同じ異変がおこった。

二人は、娘がいない家の中で、あたかも、まだレイナが生きているかのようにふるまいだした。霊魂の存在など信じないアルロスも、この時ばかりは、本当にレイナが帰ってきているのではないかと疑ったほどだ。

だが、すべては幻であったことが、やがてわかった。アーゼル夫妻の行動は、刃物で自分の手を切るなど、さらにおかしなものになり、やがて日常生活さえ困難になってしまった。

そして、レイナが亡くなってから一年が過ぎたある日の夜、二人は、娘のあとを追うように自ら命を絶ったのだ。

「ジーミナスよ。勝手なことばかり言って悪いが、おれは、今こそ、自分の目的を果たそうと思っている」

アルロスの言葉に、ジーミナスは、無言のままうなずいた。

「力なき王は、われらを完全に信用している。無能な上級士官どもを遠ざけ、おれたちにこ

の国の未来を託したのだ」

王宮の見晴台からのぞむ闇にひとみを凝らしながら、アルロスは宣言するように言った。

ジ―ミナスも、その横顔に怒りの気配を漂わせながら応じた。

「はい、あくなき権力の闇から民を解放するのは、今しかありません。思う存分、積年の恨みを晴らしてください。おれは、どこまでもついていきます」

「死ぬことになると、わかっていてもか?」

「おれも、兄者と同じです。貧しさの中ですべての家族を失いました。民の苦しみをよそに権力をむさぼる者たちに、今でも死の絶望を味わわせてやりたいと思っています」

「死の絶望か・・・。そうか、わかった・・・」

二人は、深い決意を持ってうなずきあった。

これから、二つの戦がはじまる。ひとつは、東西両軍がぶつかるウルマス国の存亡をかけた戦い。もうひとつは、アルロスの復讐を成し遂げるための戦い。

彼の十年にわたる悲しみと苦悩が報われるのは、まさに史上最大の一戦がはじまろうとしている、今この時であるはずだった。

第三章　アイの思いとナフィ―サの秘密のこと

十

アイは、はじめて小屋からナフィ―サをつれだし、城壁の向こうに広がる海のような湖を

いっしょにながめてからも、時間を見つけては、ナフィーサを引っぱりまわしていた。

あの時は、はじめてということもあって、仕立てたばかりの青い衣装に着替えさせたアイだったが、街中を出歩くなら、もっと目立たない格好にするべきだ。

ようやく、そんな単純なことに気づいたアイは、結局、自分と同じ古着をナフィーサに着せて出かけるようにした。

青い衣装を着せるのは、アイの工房の中にいる時だけだ。かなり残念な気持ちもあったが、兵士に見つかるよりはいいと自分に言い聞かせるしかなかった。

アイは、色々な場所へナフィーサをつれていった。最初は、できるだけ人ごみを避けるようにしていたが、だれにもナフィーサの正体がばれないとわかってくると、しだいに行動範囲が広がりだした。

アイは、こうしたことをジャンに話したいと思っていたが、あいかわらず、ナフィーサの整備のために彼と会える時は、兵士たちからの監視の目が光っていた。

そこで、アイは、ナフィーサ本人にジャンのいる工房を案内してもらおうと思ったが、そこで、思わぬ障壁にぶつかった。

ジャンの工房がある地区は、ほかにも剣や盾など戦の道具に関わる工房が建ちならび、出入りする兵士の数がとても多いのだ。

ここには、一般人の出入りを制限するための柵と門が設けられていて、アイたちは、立ち入るのを断念せざるをえなかった。

けれども、そんなふうに行動をともにしているうちに、アイは、ますますナフィーサを身近に感じるようになり、また、ナフィーサも同じように思ってくれているらしかった。

アイは、ナフィーサを本当の家族のように思いはじめていた。

ナフィーサがアイの工房に来ると、薄暗かった部屋の中にたくさんの野の花が咲いたような気分になった。

ナフィーサがものを食べることはもちろんなかったが、テーブルに腰かけていっしょに食事を取ると、まるで母さんが生きていた時のような楽しい気持ちになった。

もう、ナフィーサのいない毎日は考えられなかった。

そして、アイは、ひとつの計画を立てた。作戦と言ったほうがいいかもしれない。

それは、ウルマス国を含めたこの地域で一年に一度だけ行なわれるヴェルウェルという祭りに、ナフィーサをつれだすことだった。

ヴェルウェルは、夏至をはさんで三日間にわたってもよおされ、その間は、さすがに兵士たちの警備もゆるめられる。

ウルマス国の外からも大勢の人々がやってきて、もともと砂漠の中継点として国際色豊かなウルマス国の町なみは、さらにさまざまな民族であふれかえることになる。

アイは、このヴェルウェルの日をねらっていた。ヴェルウェルになれば、ナフィーサに青い衣装を着せて出かけることができるかもしれない。

とりわけ、王宮前の市場は祭りの中心会場となり、日用品から遠い国々のめずらしい品々

まで、さまざまなものが売られることになる。

ちょっと変わった服装をしている異国の道化もいたりするので、たとえナフィ―サが青い衣装を着て出かけたとしても、目立たなくなるはずだとアイは考えたのだった。

アイは、ヴェルウェルの日がやってくるのを心待ちにした。自分が作った衣装をナフィ―サに着せて人々に見てもらいたいという気持ちもあった。

そして、いよいよやってきたヴェルウェルの初日。

前日からわくわくと落ち着かなかったアイは、いつも以上に朝早く寝床からおきだし、ナフィ―サを迎えにいった。

アイの工房で青い衣装に着替えたナフィ―サは、晴れわたる空の妖精のように見える。

「ああ、本当によく似あっている。やっと、この衣装を着て人前に出られるのね。今日は、人形ではなく、人形にふんした道化役になりきってね」

アイは、ナフィ―サの手を引いて表へ出た。ここからは、堂々と行くしかない。コソコソしていては、かえって兵士たちに目をつけられそうだと、彼女は、腹をくくった。

市場に着くと、店主と値引きの交渉をしている買いもの客や、立ったまま湯気の立つ器をすすっている人たちなどで、あっちもこっちもごった返していた。友達と走りまわっている、元気な子供たちの姿も見えた。

「あっ、きれいなお姫さまがいる！」

母親につれられた幼い女の子が、ナフィ―サを指さして言った。

「わあ、ほんとだ。きれい」

その姉らしい女の子も、両手を口の前にあわせて、うっとりとした声を出した。

アイは、ナフィーサと顔を見あわせた。それから、ナフィーサは、ゆっくりと腰をかがめて、いそいそと近づいてきた姉妹の頭をなでてあげた。

「あれ？あなた、お人形さんなの？」

姉の女の子が、はっとしたように言った。

「ううん、ちがうよ。お人形さんのようなお姫さまだよ」

妹のほうは、ナフィーサを人間だと思いこんで疑わない。

「この子は、お人形の世界のお姫さまなの。でも、人間界にいる時は、人間なんだよ」

もっともらしいアイの言葉に、姉妹は不思議なものをながめるような顔になったが、すぐにますますの笑をはじけさせてナフィーサの胸に飛びこんだ。

「かわいいお人形のお姫さまに、頭をなでてもらっちゃった！」

きゃっきゃっとはしゃぐ姉妹の声を聞きつけて、ほかの子供たちも集まってきた。

「ぼくの頭もなでてくれる？」

「わたしもしてほしい！」

たちまち、ナフィーサのまわりは、子供たちでいっぱいになった。みんな、指をくわえたり目をまるくさせたりしながら、この世のものとは思えないナフィーサの愛くるしさに見入っている。

おなかをすかせた小さな子供も、ナフィーサに頭をなでられれば、すぐに笑顔になった。

アイと同じように、父親や母親を失ってしまった子供たちも、涙をふいて顔を上げた。

痛くて苦しい病気に悲しんでる子供も、ナフィーサにふれられれば、すっかり元気になったように思えるのだ。

アイは、やっぱりここへナフィーサをつれてきてよかったと思った。

兵士たちに見つかる危険はあったが、こんなにも生き生きとしているナフィーサをアイは見たことがない。城壁のたもとの暗い道ばたに、重い鎖でつながれていた時とは大ちがいだ。

やはり、ナフィーサには、こんなふうにたくさんの人々から愛されている姿が、いちばん似あっているのだ。それが、人形というものの本来の姿なのだろう。

ところが、その時、鋭い男の声があたりの空気を一変させた。

「それは、人形か?おまえが持ってきたのか?」

アイが声のしたほうへ目を向けると、あごにひげをたくわえた、ひとりの兵士が立っていた。腰の剣に手をあて、にらむようにこちらを見ている。

「そうですけど・・・」

アイのこたえに、兵士はうさんくさそうにナフィーサの体をながめまわした。

「ずいぶん、うまくできているな。おまえが作ったものではないな」

「・・・・・」

断定するような兵士の言い方に、アイは、何も答えられなくなってしまった。

その様子を見て、兵士はいじわるそうに、「そうだ。この人形には見おぼえがある。城壁のそばに移した生けにえの黒人形だろう？」と声を荒げた。

（生けにえの黒人形？）

アイは、驚いた。

（生けにえの黒人形って、どういうこと？ナフィーサは、何かの生けにえなの？）

「ちがいます。この子は、そんな人形なんかじゃありません！」

アイは、思わずそう言い返していた。

「そんなはずはない。身なりを変えているようだが、こいつは、ジャンが作った黒人形にちがいない」

アイは、この兵士にうそは通用しないと思った。相手がジャンのことまで知っている以上、白を切り続けることはできない。

「きさま、どうやって、こいつを運んできた？生けにえの黒人形を勝手に動かすことは、重罪だぞ」

兵士は、指を使って口笛を吹き鳴らした。その口笛を聞きつけて、何人もの兵士たちが集まってきた。

「なんだ、どうした？」

「こいつは、城壁のそばに鎖でつないであった生けにえの黒人形か？」

「なんで、こんなところにあるんだ？だれの許しを得た？」

もう、どうすることもできない。アイは、兵士のひとりに首根っこをつかまれて、地面に押しつけられた。

それを見て、ナフィーサが悲鳴をあげたように、アイに走りよろうとした。でも、彼女も、たちまち兵士たちに取り押さえられてしまった。

「ウルマス国に災いをもたらせた生けにえの黒人形が、王宮の近くにあるとは、なんたることだ！すぐにつれていけ！」

ナフィーサは、必死にもがいたが、兵士たちの力にはとてもかなわなかった。

「やめて！ナフィーサをつれていかないで！」

アイも、懸命にナフィーサに手をのばしたが、兵士たちは、そんな彼女を冷ややかに見下ろすばかりだった。

「平民の分際で、とんでもねえことしやがって。ろう獄にぶちこんでやるから、そう思え！」

アイは、髪をつかまれ立ち上がらされた。女子供だからといって、容赦するような相手ではなかった。

強い力で背中を押され歩くことを強制されたアイだったが、それでも、心配なのは、自分ではなくナフィーサのことだった。

このままではいけない！今、ろう獄に入れられるわけにはいかない！

そう考えたアイは、とっさに走りだした。あとから考えれば、自分でも驚くような行動だったが、ナフィーサを助けたいという感情が何よりも勝っていた。

「こいつ、逃げるつもりか！」

不意をつかれた兵士たちだったが、十四歳の少女に遅れをとるはずもなかった。

アイは、ひとりの兵士にたちまち追いつかれ、手の甲で顔をなぐられた。

体重の少ないアイの体は、一瞬、宙を舞っていたかもしれない。強い衝撃とともに地面にたたきつけられたアイの首を、さらに別の兵士がしめあげた。

「めんどくせえ。この場で殺してしまおう！」

兵士が腰の短剣を抜いてふり上げたのを見て、アイは、悲鳴をあげた。

ところが、その短剣を持つ兵士の手首をうしろからつかんだ者がいる。

「やめよ！子供相手に醜態をさらすな！」

手をつかんだのは、なんと、ジ―ミナスだった。そして、兵士たちの行いをいさめたのは、その上官であるアルロスだった。

十一

兵士たちは、若い二人の将校からの、突然の横やりに目をまるくさせた。

たちまち、直立の姿勢をとりその場をつくろったが、首をしめられたことで咳きこんでいるアイと、その背中をさすって介抱しているナフィ―サの姿に肝を冷やした。

「軍人による臣民への虐待は、かたく禁じられているはずだ。ウルマスの法を忘れたか？」

アルロスの鋭い視線の前に、兵士たちは緊張に顔をこわばらせたが、それでも、その中の

ひとりが声をあげた。

「お言葉ではございますが、その小娘は、生けにえの黒人形の手錠を勝手にはずし、ここまでつれてきたのです。われらは、その罪を罰しようとしたまでのこと」

これを聞くと、アルロスは、ようやく顔を上げたアイとナフィーサに、いかにも今そのことを知ったというような目を向けた。

しかし、これは、彼の演技だった。たまたま町の視察に出ていたアルロスとジーミナスは、ナフィーサをめぐる市場での騒動を、はじめから最後まで遠目に見ていたのだ。

「なるほど、そういうことであればしかたがない。されど、相手は子供。ここは、わたしに免じて許してやってはくれまいか？」

アルロスが、末端の兵士からの尊敬を集めてやまない理由は、こういうところにあった。

ことにあたって、はじめは厳しい姿勢でのぞむものの、引くとなるとあっさり引いて、たとえ目下の者であっても相手の意思を尊重したような態度になる。

国のまつりごとを左右するほどの人物から、このような姿勢を示されれば、だれでも言うことを聞くものだ。

張りつめていた兵士の顔に、ほっとした表情が浮かんだ。

「はっ、そういうことであれば、仰せのままに。ただし、黒人形はつれていかねばなりませんが」

「ああ、そうしてくれ。黒人形が町を徘徊しては、市民の不安が募る。すまないが、よろし

く頼む。あとで酒でも届けさせよう」

兵士たちが再びナフィーサを立ち上がらせると、アイもすぐさまそれを追いかけようとした。

だが、彼女の行動をジーミナスが小声で引き止めた。

「だめだ、君はここにいろ」

「でも、ナフィーサが！」

「わからないか？今、無茶なことをしても、自らの命を縮めるだけだ。自分にできることとできないことをわきまえろ」

「でも・・・、でも・・・」

あきらめきれずにいるアイを、アルロスは、何かを考えるような目で見ていた。

この娘、どこかで会ったことがある。どこだろう？どこで、顔をあわせたのだろう？

アルロスは、頭の片すみに残された記憶をしばらく探って、はたと思いいたった。

そうだ、取りこわされて今はもうない、わが家のあと地の庭だ。そう言えば、あの時も、彼女はもうひとり別の少女をつれていた。今にして思えば、あれは、ウルマスの黒人形だったのではないだろうか？

「おまえ、たしかアイと言ったな。おれの顔をおぼえていないか？」

「・・・・・」

「いつだったか、おまえは、かつてのわが家の庭に立って、城壁の向こうにできた湖をなが

めていたではないか」

アルロスからそう言われて、アイも、仕立てたばかりの青い衣装をナフィ―サに着せて、はじめてつれだした日のことを思いだした。

「あなたは・・・」

「ようやく、思いだしたか。こんなふうに二度も偶然に出会うとは、おまえとはよほど縁があるらしい」

「・・・・・」

アイに言葉をかけながら、いったい、この娘は何者なのだ?とアルロスは疑問に思った。

正直なところ、彼は、偶然通りかかった市場で自分が見たものを信じられずにいた。だれもが恐れているはずの黒人形が、笑顔で子供たちとふれあっている姿。そして、その様子をやさしく見守るアイの存在。

そもそも、黒人形を勝手につれだされるのは、戦の際に、それを利用しようとしているアルロスにとっても困ることだ。

「おまえ、あの人形がどんなものか知っているのか?」

「知りません。兵士たちは、生けにえの黒人形だと言っていました。わたしには、何のことだかわかりません」

「・・・・・」

アルロスは、そうか、そういうことかと少しは納得したが、まだ疑問が晴れたわけではな

かった。

「そうだ、だれもが恐れ、忌みきらう人形だ。なぜ、おまえは、わざわざあの人形を解き放つようなまねをしたのだ？」

「美しいものを大切にしてはいけませんか？かわいいものを、愛でてはいけないのですか？あなただって、あの庭を大切にしているのに」

アイは、まっすぐな目をして言った。うそいつわりのない、心から自分の思いを訴えかけようとする目。

長いこと、謀略とかけ引きをめぐらす人間たちの間で過ごしてきたアルロスにとっては、それは、久しぶりに見る生きた人間の目だった。

「そうだな。おまえの言うことも、もっともだ」

アルロスは、不意をつかれたように答えた。

今まで考えたこともなかったが、あまりにもあたりまえのアイの切り返しに、面食らったような格好になった。

おもしろいと思った。この娘はおもしろい。

この時、アルロスの様子がいつもとまったくちがうことに気づいていたのは、ジ―ミナスただひとりだった。

ジ―ミナスは、急に子供に返ったかのようなアルロスの気配に、自分の心にも何か異質ものが流れこんでくるのを感じた。

だが、今は余計なことに関わっている時ではないとも思った。

「兄者、そろそろ王宮に戻らなければなりません」

「ああ、もうそんな時間か・・・」

アルロスは、われに返ったかのように答えたが、それからすぐにアイに向かって言った。

「よいか?あの人形には、これ以上かかわるな。おまえの手に負えるものではない」

「・・・・・」

「無礼なやつだ。聞いているのか?」

ふくれっつらをしているアイの姿に、アルロスは、内心ふき出しそうだった。それでも、真剣な顔のアイの前で笑うのは悪いと思い、腹の奥でけんめいにこらえていた。

「納得がいかないようだな。まあいい、忠告はしたぞ。あとは自分で考えろ」

アルロスは、ジ―ミナスとともにその場を離れた。しょんぼりしているアイをあわれにも思ったが、周囲の目がある手前、あまり、情けをかけてあげることもできなかった。

二人が去ってしまうと、アイたちを取り巻いていた野次馬が、風に吹かれた砂のようにいなくなった。

アイだけが、ただひとり、その場に取り残された。

くやしくて、くやしくて、アイの目からポロポロと涙がこぼれた。大切なナフィ―サを奪われたというのに、何もできないのだ。

いつだってそうなのだ。父さんを失った時だって、母さんを失った時だって、アイは、何

をすることもできなかった。

「どうして?どうしてなの?」

ほほを泥だらけにしているアイのもとへ、だれかが走ってきた。

「おまえさん、大丈夫かい?」

聞きおぼえのある声に顔を上げると、ジャンが心配そうにアイをのぞきこんでいる。

「おじいさん!」

アイは、わっとジャンの首にすがりついた。

「ナフィーサが、つれていかれちゃった!」

「安心しなさい。ナフィーサは、もとの場所に戻されるだけだよ」

「わたしが、いけなかったの!わたしが、勝手にナフィーサをつれだしたりしたから!こうなるのは、当然なのに。どうしてこんなことしたのかしら・・・」

自分を責めるアイの背中を、ジャンはそっとさすってくれた。

「おまえさんは、本当にやさしいね。こんなにも、ナフィーサのことを気にかけてくれるのは、おまえさんがはじめてだよ」

ジャンは、ゆっくりとアイを抱きおこした。

「歩けるかい?とにかく、わたしの工房に行こう。話はそれからだ」

アイは、手で顔の泥をぬぐいながらうなずいた。

ナフィーサと遊んでいた子供たちも、どこかへいなくなっていた。みんな、さぞかしこわ

い思いをしたことだろう。

せっかくの楽しいひと時が、兵士たちによって、だいなしになってしまった。そう思うと、アイは、残念でならなかった。

十二

出入りする兵士が多いため、これまで行くのをあきらめていたジャンの工房のある地区だったが、この日は、ヴェルウェルの初日とあって、さすがに兵士の数は少なかった。

ジャンの工房は、石造りの小さな建物で、ほかの職人たちの工房とひしめくようにならんでいた。

中に入ると、大小さまざまな人形で壁ぎわの棚がいっぱいになっている。その数の多さに、アイは、目を見開いた。

「これ、みんな、おじいさんが作ったの？」

「そうだよ。もっとも、どれもこれも昔の売れ残りだけどね」

ジャンは、そう言って苦笑いした。

「ここにある人形は、みんな、魔よけに使われるために作ったものなんだよ。今まで言わなかったが、かつてのわたしは、魔よけの人形を作る職人だったんだ」

魔よけの人形。

その言葉に、アイは、さっきの兵士たちが「生けにえの黒人形」と言っていたのを思いだ

した。

そのことを伝えると、ジャンは、「そうか」とつぶやいて深く息をはきだした。

「いいかね、よくお聞き。今からわたしが話すのは、おまえさんが生まれるずっと前のことだ。わたしが、なぜ、ナフィーサを作ったのかという話だ」

ジャンは、そう言って暖炉で温めた飲みものをアイに差しだした。

「もう、ずいぶん昔になるが、わたしには、妻とひとりの娘がいた。そのころから、わたしは、すでに人形職人で、師匠について人形作りにはげんでいた。しかし、人形なんてものは貴族のぜいたく品で、そうそう買ってもらえるものではない。だから、わたしたちの家族は、いつも貧乏で、食べるものにもこと欠くありさまだったよ。それで、若かったわたしは、もっとちがう人形を作った方が売れるのではないかと師匠にたずねてみた。だが、師匠の答えはいつも同じ。人形は、人々の心に明かりを灯すためにあるものだ。それ以外の人形など、人形ではないとな。師匠は、わたしが魔よけの人形を作りたがっているのを見ぬいておったのだ」

ジャンの話は、こうだった。

当時、ウルマス国には、たくさんの飢えた人々と病気に悩まされる人々がいた。それは、現在も同じだったが、ジャンによれば、当時は、今以上の悲惨さだったという。

みんな、その日を生きるのに精一杯で、人形を買い求めることができるほどの裕福な者は、庶民の中にはひとりもいなかった。

でも、そんな時だからこそ、人々は何かにすがりたくなるものだ。

ジャンは、それには、魔よけの人形がいちばんだと考えた。本当に効果があるかどうかは別として、魔よけの人形を持っているというだけで、多くの人々は安心して生きていけるのだ。

ジャンからしてみれば、魔よけの人形でも、立派に人々の心に明かりを灯すことになると言いたかったのだった。

けれども、師匠はそれを認めなかった。師匠は、ジャンに「おまえの人形作りには、よこしまな心がある」と言った。

魔よけの人形は、ただ飾っておくものばかりではない。たとえば、病に苦しむ人がいたら、魔よけの人形をその身がわりにさせて焼いてしまうのだ。人形からしてみれば、なんともあわれで悲しい話だ。

もっとも、本当にそれで人々の病が治るのなら、師匠もダメとは言わなかったかもしれない。

だが、ジャンの作る魔よけの人形には、そんな力は、これっぽっちもなかった。若いころのジャンは、ただ、金をかせぎたいがために、魔よけの人形を作ろうとしていたのだ。

「師匠は、そういうわたしのあさましい考えを厳しくいさめた。今思えば、師匠は、わたしをあやまった方向へ進ませたくなかったのだろう」

ジャンは、そこで深くため息をついた。とても深く、どこかせつないため息だった。

「だが、わたしには、そんな師匠の思いがわからなかった。わたしは、師匠のもとを出て、勝手に魔よけの人形を作りはじめた。人形は、驚くほどよく売れたよ。おかげで、わたしは、妻や娘に裕福な生活をさせてあげられるようになった。もともと、魔よけの効果などないニセモノの人形だ。それでも、人々は、争うようにして、わたしの作った人形を買い求めていった。そんな時だ・・・」

そんな時、王国に原因のわからない奇病がはやりだしたのだ。その病は、人間を立ち上がらせなくさせ、あっという間に心と体をむしばみ、最後には死なせてしまうという恐ろしいものだった。

恐怖にかられた人々は、ジャンの人形に救いを求めた。不気味な病から逃れるために、先を争って魔よけの人形を手に入れようとしたのだ。

うわさは、たちまち、王宮の役人たちの耳にも入った。

もともと、この国には、地震や日照りなどの災害が続いた時や、病がはやった時などに、災いが治まることを願って黒い衣装を着せた生けにえを差しだすという風習があった。

差しだす相手は、この地方に古くから伝わる天の神々。差しだすのは、まだ成人していない見目うるわしい少女。

この時も、役人たちは、生けにえとなる少女を探していた。もちろん、おふれを出して集まるものではない。

それで、役人たちは、ジャンの工房へとやってきた。生けにえと魔よけの人形に関係はな

いが、もしかしたら、魔よけの人形でも病を治めることができるのではないかと考えたのだ。

しかし、彼らがジャンの工房で見たものは、十四歳になったばかりの美しい少女、娘のナフィーサだった。

「やつらは、まるで宝物でも見つけたかのような顔をして、そのままナフィーサをつれていこうとした。わたしの大切な、かけがえのないたったひとりの娘を生けにえにしようとしたのだ」

役人たちは、強引だった。いやがるナフィーサの腕をつかみ、無理やり外へ引きずり出そうとした。

「父さま!」

手を伸ばしてさけぶナフィーサを見て、ジャンは、思わず役人の体にうしろから組みついた。

「お待ちください!娘だけは、どうかごかんべんを!」

「こいつ、われらに刃向かうつもりか?」

「そうではございません!ただ、娘だけはお許し願いたいのです!かわりに、どんな病もたちどころに消し去る人形をお作りします!」

「何だと?」

「この世の病を、根の深きところから絶やすための人形です。それさえあれば、もう生けにえなど必要ございません!」

まったく、口から出まかせの話だった。それでも、娘を必死に守ろうとするジャンの勢いに押されたのか、役人たちは、たがいに顔を見あわせた。

もともと、魔よけの人形で、どうにかならないかとやってきたこともあって、彼らにも迷いが生じた。

もしも、ジャンの言うことが本当なら、ウルマス国は、これから生けにえの心配をしないですむことになる。

生けにえを調達しなければ、自分たちが殺されるかもしれない役人たちにとっても、それは、願ったりの話だった。

彼らは、しぶしぶではあったが、ジャンの願いを聞き入れた。ただし、それで病が治まらなければ、次は娘のナフィーサをつれていくという条件つきで。

「あなた、あんな約束をして大丈夫なんですか?」

役人たちが帰っていったあと、不安げにたずねる妻の問いに、ジャンは努めて冷静に答えた。

「なに、心配はいらないよ。わたしに任せなさい。こんな土地とは、おさらばするんだ。わたしに考えがある」

「逃げるの?役人たちにつかまらない?」

ナフィーサは、まだふるえが止まらない様子で胸の前に手をあわせていたが、ジャンは、そんな娘を抱き寄せて自身ありげに言った。

「あんな連中につかまるものか！安心しなさい、おまえは必ず守ってみせるから」

ジャンは、覚悟を決めた。これまでかせいできた全財産を使って、生まれ育ったウルマス国を捨てるのだ。

たとえどんな苦難が待っていようと、大切なひとり娘を生けにえにされるよりはましだ。迷いなどあるはずがなかった。

十三

その日から、ジャンは、夢中でもうひとりのナフィーサの製作に取りかかった。食べることも忘れ、寝ることも忘れ、ただ一時でも早く新しい人形を作って、娘のナフィーサを救おうとしたのだ。

同時に、ウルマス国から脱出する手はずも考えた。役人たちが人形のナフィーサを生けにえにしている間に、家族で逃げださなければならない。

城壁の外に地平線まで続く砂漠が広がっているのは、ジャンにもわかっていた。そこは、旅なれた者でも、いつ命を奪われてしまうかわからない危険な場所だ。

しかし、ほかの国々へと向かう商人になりすまして、どこかの隊商にもぐりこめば、なんとかなるかもしれない。

こうして、彼は、わずかひと月のうちに、娘に似せたもうひとりのナフィーサを作り上げた。脱出の準備も整った。すべては、うまくいくように思われた。

「だが、何もかも無駄だった。わたしの娘は、人形ができあがる前に、例のはやり病にかかってしまったのだ」

それは、ジャンにとって、役人たちにナフィーサを奪われそうになった時以上の衝撃だった。

ナフィーサだけではなかった。それからすぐに妻も同じ病に倒れ、ジャンは、二人の看病に追われることになった。

しかし、彼女たちの容態が回復することはなかった。

次の満月の晩、二人は、つれそうようにして息を引き取った。目を閉じる瞬間、ナフィーサは、最後の力をふりしぼるように、かすれた声でジャンに言った。

「父さま、悲しまないで。わたし、すぐに戻ってくるから。父さまが、役人たちからひどい仕打ちを受けないように、わたし・・・、必ず戻ってくるから・・・」

ナフィーサは、ジャンにかたく手を握られたまま旅立った。まるで、ろうそくの灯火が燃え尽きるような、静かでおだやかな表情を浮かべながら。

「わたしは、大切なものをいっぺんに失ってしまった。あれは、人々の弱みにつけこみ、魔よけの人形で金もうけをしたわたしへの天罰だったのだ。師匠は、こうなることを恐れて、わたしを厳しく諭そうとしてくれていたのだよ」

結局、ジャンの娘のナフィーサが亡くなったことで、役人たちは、人形のナフィーサを生けにえにするしかなくなった。

けれども、この時、不思議なことがおこっていたのだ。

ジャンは、あくまで、ただの人形としてナフィーサを作り上げたつもりだった。歯車によって少しは動くが、勝手に手をふったりすることなどない、ただの木の人形だ。

ところが、実際にできあがったナフィーサはちがった。

生けにえに差しだされる前の晩のことだった。

横になっていたジャンは、まるで工房の中を流れ星が通りぬけたような強い光を感じて目をさました。何ごとかと思ってあたりを見まわしたが、工房に変わったことはなかった。

気のせいかと思い、再び横になろうとしたジャンだったが、その時、ふいにだれかの気配を感じてふりむいた。

なんと、そこには人形のナフィーサが立っていた。ナフィーサは、寝る前に工房のすみに立てかけておいたはずだ。しかも、その顔には、人の手によって作られたものとは思えない、生きた表情が宿っていた。

ジャンは、息をのんだ。はじめは、悪魔がのりうつったのかと思ったが、それにしては、ナフィーサに闇を感じさせるような恐ろしげな様子は少しもない。

「おまえは、いったい何者だ?」

ナフィーサは、答えなかった。ひとりで歩くことはできても、言葉だけは話せないのだ。でも、その分、わずかな目や手の動きで、何かを伝えようと必死になった。

ジャンは、その時、思い出した。亡くなる瞬間の娘の言葉を。必ず戻ってくると言った、

ナフィーサの遺言を。

「まさか、おまえ・・・」

ジャンは、確信した。

これは、娘のナフィーサだ。死んだナフィーサがよみがえって、その魂が、わたしの人形にのりうつったのだと。

夢を見ているようだった。夢なら、さめないでほしいと思った。

ジャンは、喜びにむせび泣き、こんな奇跡をおこしてくれた神々に感謝した。

なんと、ありがたいことだろう。師匠の教えを守らず、魔よけの人形を作り続けたわたしに、こんな情けをかけてもらえるとは。

ジャンは、これまでのおのれの行いを恥じ、二度と魔よけの人形は作るまいとかたく心に決めた。

しかし、こうなると、この人形を生けにえに差しだすわけにはいかないと思うのは、当然のことだった。

ジャンは、もともと計画していたとおり、どこかの隊商にもぐりこんで、人形のナフィーサとウルマス国から脱出しようと思った。そこで、ありったけのお金と持てるだけの食料をかばんにつめこむと、ナフィーサの手を引いて工房を出た。

もちろん、こんな真夜中に城壁を越えて国から出ていく隊商など、あるはずもない。ジャンは、ナフィーサと暗い路地のすみに身をかくして、朝が来るのを待った。

けれども、城の役人たちは、そんなにあまくはなかった。生けにえとなる人形のナフィーサを引き取りにきた彼らは、工房にジャンとナフィーサがいないのを見て、すぐに追っ手をかけた。

若かったジャンは、まだまだ体力に自信があったが、人形のナフィーサは、今と同じく不器用に動くことしかできない。二人は、たちまち捕らえられてしまった。

「役人どもは、人間のような動きをするナフィーサを見て少なからず驚いていたが、結局、わたしからナフィーサを取りあげて、太陽の丘と呼ばれる場所へつれていった。聞いたことがないかな？城壁の向こうにある、神々に生けにえをささげる場所のことを」

アイは、思い出した。はじめてアルロスと出会った時、彼は、城壁の外の高地のことを「太陽の丘」と呼び、「あそこには、太陽などない。光も希望もない。あるのは、悲しき者たちの無念の悲鳴だけだ」と怒りをにじませていた。

「ナフィーサは、そのいちばんの高みから突き落とされそうになった。目の前でわが子を殺される気分だったよ。わたしは、縄でしばられたまま、役人たちの腕をふりほどいてナフィーサのもとへ走りだした。その時だった。突然、大地がはねるようにゆれはじめ、空に大きな穴が開いたのだ」

「穴？」

アイは、思わず聞き返していた。

空に大きな穴が開く光景など、彼女は見たことがない。それは、この世のものとは思えな

い、想像しただけでも恐ろしい世界だった。

「穴が開いて、どうなったの？ナフィーサは、無事だったの？」

ジャンは、腰かけに深く体を沈めてこたえた。

「ナフィーサは、無事だった。役人どもが、腰をぬかしてしまったからな。かわりに、われわれすべての人間に災難がふりかかってきた」

穴は、地獄からの通り道だった。そこから噴きだしたまっ黒な雲は、たちまち、すべての天空をおおい、地上にすさまじい雨をふらせた。

巨大な地震と、経験したことのない豪雨。

「わたしたちは、神々の怒りにふれてしまったのだ」

ジャンは、重い口ぶりで言った。

「本来、生けにえは、生身の少女でなければならない。それを、魂を宿しているとはいえ、人形に肩代わりさせようとしたやり方に神々は怒り、地上にいるすべての人間に報いを受けさせようとしたのだ」

神々の引きおこした大災害は、人間世界に大きな傷あとを残した。

たくさんの人が、亡くなった。たくさんの子供が親を失い、生きていくのがむずかしくなった。報いと言うには、あまりにも重い報いだった。

「すべての天災が終わった時、人々は、被害の大きさに立ちすくむばかりだった。そして、災いのもととなったナフィーサを恐れるようになった」

けれども、だれひとりとして、ナフィーサに手を出せる者はいない。

そこで、王宮の役人たちは、ナフィーサを城壁の外へと追放し、鎖でつないで動けないようにしてしまった。そうしておけば、人間の手をわずらわせずに、いずれ、こわれてしまうだろうと考えたのだ。

ジャンは、ナフィーサを守ろうと必死だった。これでは、太陽の丘から突き落とされる生けにえと同じだ。こんなことをしていれば、神々のさらなる怒りにふれることになると、王宮の役人たちにかけあった。そして、城壁を出てナフィーサの手入れができるよう許しを得たのだ。

ジャンは、ナフィーサのいる場所に小屋を作り、雨風をしのげるようにした。そのことをおもしろく思わない兵士たちから小屋をこわされても、何度も何度も直し続けた。

そうして、長い年月がたった。

災害の傷あとも少しずついえて、人々は、ようやく神々の怒りの恐怖から開放されはじめたが、そんな中、アイとナフィーサは出会ったのだった。

「わたしには、おまえさんが、神々からの使いのように思えてならないんだよ。わたしも、ずいぶん歳をとってしまった。いつまでも、ナフィーサの世話を続けることはできない。どうか、これからもナフィーサのよき友達でいてほしいのだ。お願いできないだろうか?」

ジャンから願われるまでもなく、アイは、はじめからそのつもりだった。

ただ、今のアイは・・・、そう、ジャンの話を聞いたアイの心の中は、嵐のように荒れて

いた。

ひどすぎる・・・。

アイは、ナフィーサに押しよせる不幸をのろいたい気持ちだった。

いったい、ナフィーサがどんな悪いことをしたというのだろう?ナフィーサには、何ひとつ落ち度はない。

両親に大切に育てられ幸せに暮らしていたひとりの少女が、神々への生けにえとされそうになり、病に犯され、あげくの果ては、命を失い人形に魂を宿してからも、人々から忌みきらわれ国から追放されてしまった。

こんなことが、許されていいのだろうか?

「わたし、ナフィーサを見てくる!」

アイは、ジャンの工房を飛びだした。うしろからジャンの呼び止める声が聞こえたが、アイは、ふり返らなかった。

ナフィーサのもとへ走っている間、アイの目からは、とめどなく涙がこぼれてきた。

なぜ、この世界には、こんなにも無慈悲なことがはびこっているのだろう?どうして、神々は、本当に苦しむ人々に、もっと早く手を差しのべてくれないのだろうか?

アイは、ナフィーサと自分の境遇を重ねあわせていたのかもしれない。

早くに両親を失ってしまったアイ。今や、彼女は、だれからも助けられることなく、だれからもふり返られることさえなく、苦しい生活の中に身をおいているのだ。

世界に自分のことをわかってくれる人が、だれもいないさみしさ。きっと、ナフィ―サだって、同じ気持ちでいるにちがいないのだ。

十四

アイが小屋にたどり着いた時、ナフィ―サは、今までと同じように鎖につながれ、悲しげに、それでも道行く人々にほほえみかけていた。

だが、そんなナフィ―サにこたえてくれる者は、ひとりとしていなかった。それを見た瞬間、アイの胸は、はりさけそうになった。

「ナフィ―サ！」

アイの姿を見たナフィ―サの目が、まるで、飼い主を見つけた子犬のように輝いた。

けれども、アイの涙は止まらない。彼女は、笑顔で迎え入れようとするナフィ―サの足もとにすがりついて声をしぼりだした。

「もう、どこかへ逃げよう？わたしといっしょに、遠くへ逃げようよ。あなたは、何も悪くない！悪くないのに・・・」

その先は、言葉にならなかった。アイは、その場に泣きくずれたまま、やせた肩をふるわせた。

すると、そんな彼女の肩を、ひざまずいたナフィ―サがゆっくりと抱き寄せた。

「泣かないで。お願いだから、泣かないで」

顔を上げたアイは、まゆをひそませたナフィーサの表情に、そんな声を聞いた思いがした。アイは、ますますつらくなって、ナフィーサの胸に涙でくしゃくしゃになった顔をうずめた。

今日は、泣いてばかりいる。こんなに泣いたのは、何年ぶりだろう。母さんが亡くなった時にだって、涙が出なかったアイなのだ。

いや、もしかしたら、アイは、母さんがこの世を去った瞬間から、あまりの苦しみのために、涙というものを忘れてしまっていたのかもしれない。その忘れてしまっていた涙が、ナフィーサとふれあうことによって、また、戻ってきたのかもしれない。

どれほどの時間がたったことだろう。

いつの間にか、空には星たちがきらめいていた。月のない夜は、彼らをいっそう冷酷な美しさに輝かせ、そのあわい光をアイとナフィーサのもとにふり注がせた。

ようやく泣きやんだアイは、しっかりとした声で誓いを立てるように言った。

「ナフィーサ、たとえ世界中が敵になっても、わたしだけは、絶対にあなたの味方だからね」

「・・・・・・」

「いつでも、どんな時でも、どんなことがあっても、わたしは、あなたの友達よ。忘れないでね」

「・・・・・・」

アイの言葉に、ナフィーサの目が水晶玉のように大きく見開かれた。それから、彼女のほほを、星明かりと見まがうほどのキラキラと光るものが流れていった。それは、ナフィーサ

が生まれてはじめて流す涙だった。

「涙・・・。あなたも、涙が出るの？」

驚いたアイが人さし指でその涙をぬぐってあげると、ナフィーサは、よくわからないというように、小さく首をかしげて笑った。それにつられて、アイも笑った。笑いながら、また、泣いた。

このまま、時が止まってくれればいいのに。

そう、アイは思った。時が止まれば、これ以上悲しまなくてすむ。いっしょに喜びが失われてしまったとしても、苦しみがなくなるなら、どんなに心が楽になることか。

けれども、その時だった。

アイのそんな思いは、夜の静けさを突如として破った、けたたましい王宮の鐘の音によって打ち消された。

王宮の鐘は、通常の時を知らせる以外に祝いごとの時にも鳴らされたが、大きな災害や事故など、何か大変なことがおこった時にも打ち鳴らされることになっている。そして、こんな夜ふけにひびく鐘の音は、明らかに悪いことの知らせにちがいなかった。

「何がおこったの？」

アイは、はじかれたように立ち上がった。扉の閉ざされていた家々からも、不安な表情をした人々が何事かと飛びだしてきた。

「みんな、おきろっ！戦だ！戦がはじまったぞ！」

城壁の上の方から、見張りの兵士のさけび声がした。

「大変だ！太陽の丘の向こうに、火の手があがったぞ！」

別の兵士の声も、あとを追うように聞こえてきた。そして、その言葉を証明するように、空がぼんやりと赤く染まってきた。

（本当に？こんな月のない暗い夜に、どうして？）

アイは、兵士たちの警告にとまどった。

城壁の外で、東と西の軍勢がおたがいの様子をうかがっていたのは、アイだって知っていた。それは、もうずっと以前から変わらないことで、時々、小競りあいもおこっていたのだ。

しかし、明かりのない広大な台地では、戦は昼間と決まっていた。夜では、敵味方の区別すらつかず、満月でも出ていないかぎり戦などできないからだ。そして、今夜は月がない。

アイは、ナフィーサの手を引いて立ち上がらせた。ここから逃げたほうがいいのではないかという不安が、アイの胸のうちでどんどん大きくなっていった。

手錠をはずすのが、一日遅ければよかった。アイが、今日一日のできごとをくやしく思い返したのも、無理はない。手錠の鍵は、すでに、別のものに変えられていたのだ。

（どうしよう、ナフィーサの鎖をはずさなければ！）

アイは、あせった。大きな石を二つひろってきて、鎖をたたいてちぎろうとしたが、そんなものでは、びくともしない。

そうこうしているうちにも、城壁の上は、ウルマス国の兵士たちでいっぱいになった。

戦っているのは、東西の軍勢どうしだが、彼らがねらっているのは、このウルマス国だ。どちらが勝つにしても、結局は、自分たちの身は自分たちで守るしかないのだ。

剣と剣とがぶつかりあう音が、城壁をはさんだすぐ向こう側へと近づいてきた。そこへ、アイたちのことを心配して、肩から麻袋をかけたジャンがやってきた。

「二人とも大丈夫かい？」

「わたしは平気。でも、ナフィーサの鎖がはずれないの！」

アイがうったえると、ジャンは、麻袋から取りだしたノミとカナヅチを使って、あっという間に鎖を切ってくれた。

「ここは、危ないから、一度、わたしの工房へ戻ろう。それから出なおすんだ。城門から外へ逃げださないかぎり、命はない」

「でも、戦がはじまったら、家の地下壕に逃げるよう、王宮からおふれが出たって聞いたけど」

「いや、それは危険だ。なぜ、そんなおふれが出たのかわからないが、そんなことをすれば、自ら逃げ道を閉ざすようなものだ。敵が王国内に侵入してきたら、ひとたまりもない。ここは、わたしの言うことを聞いてほしい」

アイは、うなずいた。もとより、戦のことはよくわからない。生きのびるためにどうすることがいちばんいいのか、何もかもがはじめての経験なのだ。

アイは、緊張のあまり、のどがからからに渇いていることに、今さらのように気づいた。

父さんは事故で死に、母さんは病で死んだ。今度は、自分の番かもしれない。そんな思いが、頭をかすめた。

（わたしは、戦で死ぬのかしら・・・？）

アイは、ジャンの工房への道を急ぎながら、早鐘のような心臓の鼓動をどうすることもできずにいた。

第四章　神々の怒りとウルマスの黒人形のこと

十五

ウルマス国の城壁の外側に上がった炎の明かりは、王宮からも見えていた。

王族、貴族をはじめ役人から庶民にいたるまで、すべての人々があわてふためき、死の恐怖におびえていた。冷静だったのは、二人の男だけだった。

「兄者、東の方角に火の手が上がりました！」

アルロスの執務室に、急を告げるためかけこんだジ―ミナスだったが、アルロスは、すでに窓から赤く染まる空をながめていた。

「ああ、とうとう、はじまったか。月明かりのない夜をねらうとは、おもしろいことをする。敵が攻めてきたら、家の地下壕に入れという民への指示は、本当に徹底されているか？」

「はい、兄者から命じたとおりにおふれを出してあります。本来であれば、王宮に逃げこむのがいちばんでしょうが」

「敵が人間であるなら、籠城戦に持ちこむのが定石だろう。だが、黒人形がもたらす災厄が、前回と同じものであるなら、そうはならないはずだ。相手は、空から襲ってくる」

「上級士官たちには、各々の持ち場を固めるよう伝えましたが」

「彼らが、われらの言うことを聞くかどうか。それより、例の件を実行に移さなければならないな」

「はい、兵に命じますか？」

やや、緊張した面持ちで問いかけるジ―ミナスに、アルロスは、考えをめぐらせた。

東西両軍の間で大規模な戦闘がはじまったら、すぐさま、黒人形を太陽の丘へと連行し、生けにえの儀式をとりおこなう。民を家の地下壕に避難させ、黒人形がもたらす災厄から身を守らせる。それが、当初の計画だった。

災厄が、どれくらいの規模でいつまで続くかは、予想できかねたが、少なくとも、敵に壊滅的な打撃を与えることはできるはずだ。

だが、それには、ひとつだけ問題があった。いったい、だれが、黒人形と行動をともにするか？前回の災厄の時には、黒人形のそばにいた役人全員が命を落とした。助かったのは、作り主のジャンひとりだけだった。今回も、同じことがおこるだろう。

ジャンひとりに命じたところで、彼は、黒人形ともども逃走をはかろうとするにちがいない。アルロス自身が、命をかけて行ってもかまわなかったが、その場合、災厄後に生き残った民を、だれが導くのか？

そこで、思い出したのが、市場で再会した少女、アイのことだった。

「あのアイという娘、危険が身に迫れば、どう行動するだろう？」

アルロスの突然の言葉に、ジ―ミナスは、とまどいながら答えた。

「昼間のあの娘ですか？・・・そうですね、地下壕に入れという指示を無視して、黒人形と逃げようとするかもしれませんね」

「ああ、そうだろう。そうにちがいない」

ウルマスの黒人形を、そうとは知らなかったとはいえ、つないであった鎖から解き放ち、まるで親友のように接していたアイ。歳は、かつてのレイナと同じくらいだろう。

彼女の黒人形を見る目には、いささかの邪念も存在していなかった。黒人形を利用し、目的を果たすためには、どんな犠牲もかえりみない自分たちとは大きなちがいだ。

なぜ、あんなに純粋な目をしているのか？なぜ、人々が恐れ遠ざける黒人形をこわがらないのか？

アルロスは、思った。

アイには、自分が忘れかけていたなつかしいにおいがする。家族が皆、笑顔で食卓をかこんでいたころの幸福なにおいが。

もしかしたら、彼女なら、おのれの命を失うことなく、黒人形に災厄をおこさせることができるのではないか？

「ジ―ミナス、あの娘を探し出せ。われらには、あの娘の力がいる」

「・・・どういうことですか？」

「あの娘に、黒人形を導かせるのだ。太陽の丘へと」

アルロスは、低くうなるように言った。ジ―ミナスの目が、衝撃に見開かれた。

「あの娘にですか？」

「黒人形を無理に太陽の丘へつれていけば、その任を担う者にも危険がおよぶ。だが、あの娘なら、どうだろう？あとは、神々の怒りが、地上にあるすべての悪しきものを消し去ってくれるはずだ」

「・・・・・・」

アルロスは、言ってしまってから、本当にこれでいいのかと思った。これからおこる災いに、アイを巻きこんで本当にいいのかと。

いや、これでいいはずなのだ。東西両軍を全滅させ、ウルマス国の王と腐った権力をこの世から抹殺すること。それが、家族をことごとく奪われたおのれの目的なのだから。

今は感傷にふけっている場合ではない。敵は、遅かれ早かれ城門を打ち破り、ウルマス国になだれこんでくるだろう。

「ジ―ミナス、あの娘を黒人形とともに城外へ逃れさせなくてはならぬ。われらも、ただちに出陣しようぞ！」

「はっ！」

二人は、剣を手に取り、まずルベルタ四世のもとへ参上した。あまり気乗りはしなかった

が、出陣前のあいさつをする予定だった。

だが、王の寝室で彼らが見たものは、これからおこるであろう悲劇を前に取り乱し、すでに右も左もわからないありさまになっている、ルベルタ四世のあわれな姿だった。

「これは、どうしたことか?」

医師や侍従が、暴れる王を必死になだめているのを見て、アルロスは、恐れをなしている侍女のひとりに問いかけた。

「はい、王宮の鐘が鳴り響いたとたん、あのようにおなりにあそばされまして。おいたわしいかぎりでございます・・・」

アルロスは、一瞬、凶悪な感情がわきおこるのを身の内に感じた。

そうだ、ずっとこの男を、こんなふうに悲惨な目にあわせたかったのだ。レイナの敵であるこの男を。

アルロスは、ジ―ミナスと顔を見あわせ、だれにも気づかれないよう小さくうなずきあった。今、混乱に乗じて、この場でルベルタ四世にとどめをさすことも可能だったが、そんな必要もなかった。

「よいか。われらは戦場におもむく。陛下のことは、そなたたちに任せるが、いよいよの時は、自らの命を守ることだけに専念せよ。王宮の地下壕へと入るのだ。できるだけ、奥深くへ逃げるのだぞ」

アルロスは、そう侍女に言い聞かせて、ジ―ミナスと王宮をあとにした。これが、ルベル

タ四世を目にする最期の機会になるだろうと確信しながら。

アルロスとジ―ミナスは、信頼のおけるわずかな兵士だけを伴い、わき目もふらずにナフィ―サのいる小屋へと向かった。

ジ―ミナスは、すでに、アルロスに命じられたとおり、アイの行方をさがすよう複数の部下に指示してあったが、彼女のいる場所の見当は、はじめからついていた。アイは、まちがいなく、アルロスたちが向かう先、つまり、黒人形といっしょにいるにちがいない。

「城門は、どれくらいの時間、持ちこたえられるだろう?」

「たいした時間は、かせげないと考えます。できるだけ多くの弓箭隊を差し向けてはいますが、城門が打ち破られれば、王宮は、たちまち制圧されるでしょう」

アルロスの問いに、ジ―ミナスが答えた。

「敵に滅ぼされるのが先か、王が自ら命を絶つのが先か、ということか」

「はい、仰せのとおりです」

アルロスは、先を急ぎながら、死を目前にしたルベルタ四世の狂った姿を思い返していた。

レイナを生けにえにしようとした、ウルマス王の死が目前に迫っている。それは、まちがいない。あの男の命は、今まさに燃え尽きようとしているのだ。

それなのに、どうしてだろう?いよいよその時を前にして、アルロスは妙に冷めていた。

「おかしなものだな。あの男の死を願い続けてきたはずなのに、いざとなると、以前のような憎しみを抱けないとは」

「兄者は、やさしいのです。ですが、お気をつけください。今は、わずかな情けが命取りとなる時です」

「ああ、わかっているよ・・・」

ジ―ミナスの言葉に、アルロスは、苦しく笑った。笑いながら、おれは、何をやっているのだと思った。レイナと両親の敵を討つために、今日まで生きながらえてきたというのに、肝心なところで心に迷いが生じるとは。

それからの二人は、無言で先を急いだ。

途中、アイの行方を追っていた部下のひとりが、報告のために戻ってきた。それによると、アイは、すでにナフィ―サをつれて、移動を開始しているとのことだった。さすがのアルロスも、これには、面食らった。

「あきれたな。もう、黒人形をつれだしたのか?昼間、殺されかけたというのに、腹のすわった娘だ。それで、どこへ向かっている?」

「黒人形の作り主の工房です」

「工房?地下壕へ逃げこもうとしているのか?」

「いいえ。生き残るためには、城門から外へ逃げだすしかないと考えているようです。黒人形の作り主が、そう言って、娘を説得していましたから、城門へは必ずやってくるはずです」

部下は、そう説明した。彼は、ジャンがナフィ―サの鎖を断ち切った時、すでに、その場でアイたちの行動を監視していたのだ。

「そうか。ならば、われらも城門へ向かうとしよう。敵と一戦交えることになるだろうが、その方が好都合だ。戦にまぎれて、黒人形を城外へ逃がしやすくなる」

アルロスは、心のどこかにうしろめたいものを感じながら、ジ―ミナスに言った。あらゆることが、彼のとまどいを無視して、その思惑どおりに進んでいたのだ。

十六

アイとジャンは、ナフィ―サの手を引いて工房へと急いでいた。

街の人々は、これからおころうとする悲劇に備えて、再び家の扉をかたく閉ざしている。事前に出されていた役人からの指示にしたがい、それぞれの地下壕にかくれているのだ。

だから、街中に兵士以外の人影を見ることはほとんどなかったが、アイたちが工房にたどり着いた時、どうしたことか、そこには、何人もの平民の男たちが待ちかまえていた。手には、木の棒やこぶしよりも大きい石を持っている。アイは、息をのんだ。

「なんだ、おまえたちは？」

ジャンが問いかけると、ひとりの男が逆に質問してきた。

「そこにいるのは、生けにえの黒人形だな？」

男たちのただならぬ様子に、ジャンは、口をつぐんだ。

「そうだな？生けにえの黒人形なんだな？」

「・・・だったら、どうだと言うんだ？」

男たちは、顔を見あわせてうなずきあうと、アイたちに迫ってきた。

「その人形をつれていく。火をつけて、打ちこわしてやる」

「なんだと?バカなことを言うな!ナフィーサに危害を加えれば、何がおこるかわからんぞ。忘れたのか?」

ジャンの言葉に、男たちは、一瞬ひるんだように見えたが、それでも引き下がりはしなかった。

「じゃあ、今の状況は何だ?その生けにえの黒人形を城壁の内側へ入れたら、このありさまだ。そいつは、おれたちを不幸にする魔物だ。ちがうか?」

「戦のことを言っているのなら、見当ちがいだぞ。この戦は、ナフィーサの生まれるずっと以前から、いつおこってもおかしくないものだった。この子は関係ない」

「いいから、そいつをよこせ!」

「やめろ!わたしの娘に何をする!」

男たちとジャンの間で、もみあいがはじまった。けれども、ジャンはひとり、相手は大勢だ。素手であがらったところで、とても、かなうものではない。

「アイ、逃げろ!ナフィーサをつれて逃げるんだ!」

さけぶジャンの頭を、男のひとりが棒でなぐりつけた。ジャンは、グッとうめき声をあげ、その場にくずれ落ちた。さらに、うずくまるジャンに、今度は別の男が、石で襲いかかった。

アイは、悲鳴をあげた。

「やめて！みんな、やめて！そんなことしたら、死んじゃうよ！」

男たちは、ジャンが抵抗できないのをいいことに、好きなように棒や石でなぐりつけている。それから、おびえているナフィーサの腕を強引に引っぱろうとした。

「やめてっ、ナフィーサは、わたさないわ！」

ところが、アイが男たちにつかみかかろうとしたその瞬間、流れ星が落ちてきたかのようなすごい音が、あたりにこだました。男たちの顔が、まっ青になった。

それは、東西両軍のどちらかが、かたく閉ざされた城門に巨大な丸太を打ちつけて、外から押し開けようとしている音だった。

「や、やつらが入ってくるぞ！」

「もうだめだ。早く逃げろ！」

男たちは、アイたちをその場に残して、大あわてで逃げ去っていった。

アイは、すぐさま傷ついたジャンを抱きおこしたが、顔はまっ赤にはれあがり、口と頭からは止めどなく血が流れている。

「なんてことを！ひどいケガ！」

「・・・わ、わたしにかまわず、おまえさんたちは、二人で逃げなさい。・・・もうじき、門がくだかれる」

「そんなわけにはいかないわ！早く工房の地下壕に入りましょ！」

「いや・・・、さっきも言ったが、地下壕にかくれていたのでは、すぐ敵兵に見つかってし

まう・・・。皆殺しになってしまうよ・・・」

ジャンは、荒い息をしながら声をふりしぼった。

「わたしは、このざまだが、おまえさんたちだけなら逃げられる・・・。敵が侵入してきたら、しばらく身をかくしてから、すきをついて城門の外へ出るんだ。ありったけの水と食べものを工房から持っていくがいい・・・」

アイは、ジャンの言葉に大きく首を横にふった。

「ううん、それなら、おじいさんもいっしょよ!少しだけ待っていてね」

アイは、言うが早いかジャンの工房へ入って、中から麻袋に入れた水と食べものを肩にかついで出てきた。

それから、ナフィ―サと力をあわせて、ジャンに左右から肩を貸した。つたない歩みだったが、なんとか前へ進むことはできた。

「さあ、しっかり。どこかへかくれたら、傷の手当てをしてあげるからね」

アイはそう言いながら、ジャンが、自分たちには手の負えない大ケガであることに気づいていた。

なんてひどいことをするんだろうと、逃げていった男たちのことを腹立たしく思ったが、今はとにかく逃げることが先だ。

城門に丸太が打ちつけられるごう音は、それからも何度も響いていたが、やがて、ひときわ大きな振動がアイたちの足もとに伝わってきた。同時に、何百、何千もの兵士たちの雄た

けびも。

「城門が、破られた！」

アイは、確信した。これから、どんなひどいことが行なわれるか、それを考えただけで身の毛がよだった。

王宮前の市場で、ナフィーサにやさしく接してくれた人々の顔が思い浮かんた。そこには、たくさんの子供たちの姿もあったではないか！

街のあちこちから、早くも火の手が上がった。燃えさかる炎が、アイたちの顔をぼんやりと闇夜に浮かび上がらせている。

アイは、この世の地獄にいるのだと思った。それでも、不思議とこわいとは感じなかった。それは、きっと、そばにナフィーサがいてくれたからだろう。

ただ、アイには、ひとつだけ心残りがあった。父さんや母さんが残してくれた、大切な工房のことだ。あそこには、たくさんの家族の思い出がつまっている。母さんから受けついだ、機織り機もある。

「おじいさん、ごめんなさい。わたし、両親の形見の品だけ取ってきます。すぐに戻ってきますから、ここで待っていてください」

アイがそう言うと、ジャンは、「ああ、それがいい。そうしなさい・・・」と言ってくれた。

アイは、走って工房まで戻った。

幸い、工房とその周辺は、まだ、炎に包まれてはいなかった。しかし、ゆっくりしているひまはない。

アイは、父さんが使っていたかばんを肩にかけ、母さんからゆずり受けた首かざりを首に巻いた。それから、ジャンの傷の手当てに使うための布切れや薬草、それにナイフをかばんの中につめこんだ。

ああ、こことも、もうお別れなんだと思うと、ひどく胸がズキズキした。

アイは、工房の中に向かって、「さようなら！」と一言だけさけんだ。そして、二度とふり返ることなく、歯を食いしばって走りだした。

もとの場所まで戻ってきたアイは、もう一度ナフィーサと力をあわせて、ジャンを抱きおこした。

「お父さんやお母さんに、お別れを告げられたかい・・・？」

「はい・・・」

「・・・そうか。かわいそうに、さぞつらいだろう」

「ええ。でも、今は、おじいさんやナフィーサがそばにいてくれるから平気」

ナフィーサが、悲しそうな目でアイを見ている。涙こそ見せないものの、彼女のひとみは、星影のようにゆれていた。

アイたちは先を急いだが、行く手を炎にはばまれて、何度も引き返さなければならなかった。ようやく城門の近くまでやってきたが、思ったとおり、そこは見たことのない兵士たち

であふれかえっていた。

「あれは、東軍の兵士たちだ・・・。城門を打ち破ったのは、彼らだろう」

ジャンが、そう言った。

アイたちは、ものかげに身をひそませて様子をうかがっていたが、これでは、城壁の外へ逃れることはできない。

どうしようかと思ったその時、アイたちは、背後から声を聞いた。

「そこで何をしている?」

おそらく、そう言ったのだろう。ふり返ると、灰色の鎧に身を包んだひとみの黒い男が、長さ三尺以上はある大きな刀を手にして立っていた。アイの知らない言葉を口にするその男は、東軍の兵士だ。

アイたちが逃げようとすると、男は何かをさけんで刀をふり上げた。

(もうだめだ!)

アイは、かたく目を閉じて死を覚悟したが、間一髪、そこへ別の兵士が割って入った。今度は、よく見なれたウルマス国の兵士だ。しかもその兵士は・・・。

「早く逃げろ!もたもたするな!」

東軍の兵士がふりおろした刀を剣で受けているのは、アルロスだった。そして、すぐにジ―ミナスが加勢に入った。

東軍の兵士は、血走った目をギラギラさせながらウルマスの二人の戦士と戦っていたが、

すぐに援軍がかけつけてきた。

アルロスとジ―ミナスにも、同行してきた部下たちが助太刀に入った。

あたりは、たちまち戦場となり、もうもうと砂煙が立ち上る中、あちらこちらから断末魔の絶叫があがった。

アイは、戦で人が死んでいく姿を生まれてはじめて目の当たりにした。肉が切り開かれ血しぶきが舞う、そのあまりにも恐ろしい光景に、アイは悲鳴をあげそうになったが、声を出せば目立ってしまう。

「いいか、太陽の丘へ行け！皆が生き残る道は、ほかにない。黒人形をつれて、早く城門から逃げ落ちるんだ！」

足がふるえてしかたがないアイに、アルロスは戦いながら大声でさけんだ。

「太陽の丘へ行って、どうするの？」

「行けば、おのずとわかる！この戦を終わらせたいならば、おれの言う通りにしろ！」

考えているひまはない。アイは、相手によくわかるよう大きくうなずくと、その指示に従った。今は、ただただ、ナフィ―サやジャンを守りたい一心だった。

こうなっては、アルロスとジ―ミナス以外に、アイたちに注意をはらう兵士などひとりもいない。

アイは、かばんからナイフを取りだして、もしもの時は自分が戦うしかないと思ったが、そんな場面に出くわすことなく、なんとか、城門から外に逃げだすことができた。彼女たち

は、本当に運がよかったのだ。

しかし、城壁の外では、東西の軍勢がいたるところにひしめいて、終わりのない戦いをくりひろげている。

アイたちは、暗闇にまぎれて太陽の丘へと向かった。月がなければ何も見えないような大地だったが、今は、王国が燃える炎で足もとくらいならなんとか見える。

「だいじょうぶ?まだ、歩ける?」

ジャンに肩をかしながら、アイはたずねた。

「ああ、平気だよ。なんでもない・・・」

ジャンは、そう答えをくり返したが、しだいに力の失われていく声を、アイは耳の奥に聞いていた。顔色も、どんどん青くなっているし、口から吐き出される血は、いっこうに止まる気配がない。どう見ても、ただのケガとは思えないのだ。

そういうアイも、経験したことのない恐怖と緊張の連続に、体が悲鳴をあげていた。足が鉛のように重く感じられるのは、どこかケガをしているためかもしれない。

それに、太陽の丘まで逃げきれたとしても、そのあとは、どうすればいいのだろうか?アイには、何もいい考えがなかった。

十七

丘とは言っても、太陽の丘の頂上は、草木が一本もない絶壁のようなところだった。はる

か下のほうに、小さく川が流れているのが見える。

やはり、ここは、若い娘を生けにえにしてきた地獄の入口なのだ。

こんなさみしく気味の悪い場所で死を迎えなければならなかった少女たちは、どんなに、こわかったことだろう。みんな、家に帰りたいと泣いていたにちがいない。それを思うと、アイは、やりきれない気持ちになった。

「・・・アイ、こんなむごい話はないと思っとるのだろう?おまえさんの気持ちが、わたしにはよくわかるよ・・・」

ジャンが、かすれた小さな声で言った。

「なぜ、わたしの気持ちがわかるの?」

「かんたんなことだよ・・・。わたしも、同じことを考えていたからだ・・・」

ジャンは静かにこたえたが、その言葉には強い怒りがこもっていた。

生けにえを神々にさし出すことで、王国は守られてきた。だれもが、それを疑うことがなかった。

でも、本当にそうだろうか?神々は、本当に生けにえをほしがっているのだろうか?そもそも、生けにえをほしがるような神々なら、そんなもの、いない方が安心に暮らしていける。

「生けにえは、こんなところから突き落とされたの?」

だれに問いかけるでもなく、アイはつぶやいた。その場面を想像しただけでも、背筋を冷たいものが走る。

視線をウルマス国に移せば、そのまわりには、東西の軍勢がアリのように群がっている。日の当たらない暗闇の中で死んでいく兵士たちも、やはり、絶望的な気持ちでいるのだろうか？

きっと、そうにちがいない。だれにだって、妻がいるかもしれないし、子供たちもいるかもしれない。年老いた両親と暮らす兵士だっているだろう。

そうした家族は、ウルマス国に住んでいる自分たちとちがっているだろうか？

たぶん、何も変わらないのではないかと、アイは思った。

「なぜ、こんなことになってしまったの？どうして、神々は、辛いことばかりわたしたちに与えようとなさるの？」

アイの言葉に、ジャンは、何もこたえなかった。ふいに不吉なものを感じてアイがふり返ると、ジャンは、地面に沈みこむようにぐったりとしている。そばにいたナフィーサが、懸命にその体をゆさぶっていた。

「おじいさん！」

アイがかけよると、ジャンは、うっすらと目を開いて苦しそうに言った。

「アイ、ここまで苦労をかけたな・・・」

「どうしたの？なぜ、そんなこと言うの？」

「わたしの・・・わたしの命は、ここまでのようだ・・・。もう、目が見えなくなってきたからね・・・」

アイは、息をのんだ。ジャンの頬骨の浮き出た顔は、もはや、白い幽霊のように血の気がなくなってしまっている。

これと同じ顔を、アイは、前に見たことがあった。母さんの最期の時の顔だ。

「いや！そんなこと言わないで！ナフィーサはどうするの？」

「ナフィーサは、・・・おまえさんがいてくれれば安心だ・・・。おまえさんのおかげで、・・・わたしは、救われたよ。・・・ありがとう、アイ」

「だめよ、いっしょに生きようよ！お願いだから、死なないで！」

そうさけんだアイだったが、もう、できることは何もなかった。

「アイ、神々をうらんではいけないよ・・・。あれは、われわれの心の鏡なのだ・・・。人間が・・・心おだやかに正しい行いをすれば・・・、神々は、わたしたちを助け、・・・恵みをもたらすだろう。・・・反対に、欲望と臆病に惑わされ・・・卑劣なふるまいをすれば・・・、神々は悪鬼となって・・・わたしたちを襲ってくる・・・。そういう存在なのだ・・・」

ジャンは、諭すようにアイに言った。それから、ナフィーサのほほにふるえる手をのばした。

「・・・ナフィーサ、本当にすまなかったね。どうか・・・、どうか、おろかなわたしを許しておくれ。おまえに・・・すべてをなすりつければいいと思っていた、この・・・おろかなわたしを・・・」

ジャンの目には、たくさんの涙が泉のようにたまっていた。しだいに光を失っていくひと

みの奥に、ナフィ―サの姿がはっきりと映っている。

「・・・人は、なぜ・・・、罪のないひとりに・・・すべてをなすりつけようとするのだろうな？・・・なぜ、ひとりを見殺しにして・・・、自分たちだけが生き残りたいと思う？・・・そんなものは人間ではない。・・・ただの人形だ・・・」

ふっと、途切れたような時間が流れた。

その間だけは、遠い戦いの雄たけびも、炎をあげるウルマス国の悲鳴も、アイには、しんとして何も聞こえなかった。

そして、ほんの一時、音のない世界に包まれたアイは、生きているものだけが持つ命の温もりが、ジャンの顔から地の底へと抜け落ちていくのを見た。

「おじいさん！」

アイの呼びかけにジャンがこたえることは、二度となかった。

体をゆさぶっても、さらに大きな声で呼びかけても、石のように動かず何もこたえてくれない。死神が、ジャンをつれていってしまったことを、アイは、今、はっきりと悟ったのだった。

「そんな・・・、こんなことって・・・」

アイは、大空をあおぐと、声をかぎりにさけんだ。

「こんなことって、ないよっ！」

どうしようもない怒りと絶望感を、天の神々にぶつけるような気持ちだった。

けれども、そんなアイよりも、もっと強く感情を爆発させたのは、ナフィ―サである。ナフィ―サは、王宮の鐘の音にも似た、遠く広がる高い声で悲鳴をあげたのだ。必死に親鳥を求める、ひな鳥のさえずりのように。

「ナ、ナフィ―サ?」

アイは、驚きのあまり、しばらく、次の言葉が出てこなかった。ナフィ―サが、泣いている。それは、耳の奥に残るような、ピ―ンと張りつめた人の泣き声にちがいなかった。

われに返ったアイは、ナフィ―サを落ち着かせようと、彼女の体を二つの腕でしっかりと抱きしめた。

「お願いだから、落ち着いて。わたしが、そばにいるから」

心臓が、口から飛び出してしまいそうなほど、早く大きく鳴り響いている。今は、ナフィ―サの背中をさすってあげるだけで精一杯、かけてあげる言葉すら見つからなかった。

ジャンの亡がらを前に、アイとナフィ―サは、ありったけの涙を流し、そして、ともに疲れ果てた。

今も王国は燃え、東西二つの軍勢は戦いを続けている。アイの工房やジャンの工房も、焼け落ちてしまったにちがいない。母さんの機織り機も、そして、若かったころのジャンが作った魔よけの人形たちも・・・。

なんて、むなしい光景。なんて、救いのない世界なのだろうとアイは思った。

すると、その時、大気全体に不気味な地鳴りが波紋のように広がった。まるで、何千もの

野獣がいっせいにほえたような地鳴りだった。同時に地平線のかなたが、日の出の前のように、白くぼうっと明るくなった。

「今度は、何？何がおこるの・・・？」

不安にかられたアイの足もとが、横へ縦へとゆれだした。それも、地面のすぐ下から突き上げてくるような衝撃のあるゆれ方だ。

地震だ！と思うまもなく、近くの地面に深い亀裂が入った。

アイとナフィーサは、抱きあったまま立ち上がったが、追い討ちをかけるように、さらに奇妙なできごとがおこった。

空には、いつからか炎で赤く照らされた厚い雲が立ちこめていたが、その中心がまっ黒になったかと思うと、どんどんまわりに広がりはじめたのだ。

それは、巨大な穴だった。

アイは、ジャンの話を思い出した。ナフィーサが生けにえにされそうになった時に、大地がはねるようにゆれはじめ、空に大きな穴が開いたという話を。

考えてみれば、ここは、罪のない多くの少女たちを生けにえにしてきた太陽の丘。そして、かつての大災害の引き金となったナフィーサが、当時と同じように、ここにいるのだ。

アイは、太陽の丘へナフィーサをつれてきてしまったのは失敗だったと思った。

いや、ちがう。これは、アルロスの計略だったのではないか？彼は、何もかも承知の上で、あえて自分たちに太陽の丘へ向かうよう指示したのではないか？

猛烈な勢いで流れる暴れ竜のような雲から、大地めがけて何本もの稲妻が走った。それからすぐに、体にあたると痛みを感じるほどの、大粒の雨が落ちてきた。

「ナフィーサ、ここにはいられないわ。別のところへ逃げよう?」

ずぶぬれのアイは、そう言って、ナフィーサを太陽の丘からつれだそうとした。けれども、ナフィーサは動こうとしない。

「どうしたの?動けないの?」

アイの問いに、ナフィーサは首を横にふった。そして、雨に打たれるジャンの亡がらに視線を落とした。

「だめよ、ナフィーサ。おじいさんは、もうこの世からいなくなってしまったのよ」

アイは、なだめるように言ったが、ナフィーサは、ジャンのそばから離れようとはしなかった。

アイは、胸がつまった。けれども、もはや、動くことのないジャンを彼女たちが運ぶことはできない。

「ナフィーサ、おじいさんは、つれていけない。でも、このままここにいたら、あなたまでどうなってしまうかわからないのよ。お願い、わかって」

アイの言葉に、ナフィーサは小さな子供がするように、いやいやをした。アイは、今はこれまでと考え、少し強引にナフィーサの腕を引っぱろうとした。

ところが、その時、アイは、全身に強い衝撃を受けたのだ。

何がおこったのかわからなかったが、目を開けると、今までいた場所からだいぶ坂をころげ落ちていた。

しかし、ナフィ―サがいない。ナフィ―サだけは、今までどおり、ジャンの亡がらといっしょにいる。

アイは、何かにはじき飛ばされたのだ。そのはじき飛ばされた原因を目にした時、彼女は、悲鳴をあげた。

「ナフィ―サ！危ないっ！」

アイとナフィ―サの間に割って入っているもの。それは、下半身が獣なのに、上半身だけが女の姿をしている、羽の生えた化けものだった。

女と言っても、その顔は氷のように白く冷酷で、反対にひとみは燃えるように赤く邪悪な光を放っている。オオカミのような灰色の体は、がんじょうな四本の足で支えられ、けれども、その足は地面についていなかった。

これが、神々のひとりなのだろうか？だとしたら、こんな恐ろしげなものを自分たちは神とあがめてきたのだろうか？

「あれは、われわれの心の鏡なのだ・・・。」

ジャンの言葉が、アイの頭によみがえった。

空を見上げれば、この女の化けものと同じものが、渦のようになった黒い穴から次々と舞い降りてくる。氷のような光る雲をたなびかせ、無表情に地上を見下ろす彼女たちの姿は、

悪魔そのものと言ってもいいほどだった。

「ナフィーサ、早くそこから逃げて！」

アイは、ナフィーサに向かってさけんだが、本当に逃げなければならないのは自分だった。なぜなら、化けものたちは、冷たい笑いを浮かべながら、ナフィーサではなくアイに突進してきたからだ。

アイは、化けもののつめで、心臓がえぐり取られたような感覚におちいった。実際には、そんなことはなく血も出ていなかったが、なぜか胸が急に息苦しくなった。

化けものたちは、アイの頭のすぐ上をすり抜けたかと思うと、そのまま、ウルマス国や東西の軍勢めがけて飛んでいった。そして、地上で生きるすべてのものを容赦なく襲いはじめた。

敵も味方も関係なく、兵士たちは化けものと戦ったが、とうてい、剣や弓矢などでかなう相手ではない。またたく間に、体を裂かれ首を折られた死体が、大地に山積みとなっていった。

この世の終わり・・・。アイの頭に浮かんだのは、ただその言葉だけだった。

神々は、ナフィーサ以外のすべての生あるものを、皆殺しにしようとしているのだ。ジャンが語っていたとおりだ。

「本来、生けにえは、生身の少女でなければならない。それを、魂を宿しているとはいえ、人形に肩代わりさせようとしたやり方に神々は怒り、地上にいるすべての人間に報いを受け

させようとしたのだ」

空には、化けものたちが残した雲のすじが、高く高く網がからみあうように広がっている。その異様な光景を見つめながら、アイは、最後の瞬間は、せめてナフィーサのそばにいたいと思った。けれども、体が動かない。

ナフィーサが、こちらへかけよろうとしているのが見えたが、向かい風が強すぎて、二人の距離は、いっこうに縮まらなかった。アイは、くやしさに体がふるえた。

（母さん、わたし、もうだめだ。わたしは、母さんのように強くはなれないよ。お日さまみたいには、生きられないよ・・・）

雨に打たれながら、アイは、意識が遠のいていくのを感じた。

もしも、この時、自分の名を呼ぶ声を聞いていなければ、彼女は、永遠にさめることのない深い眠りについていたことだろう。

けれども、そうはならなかった。気を失いかけていたアイを、ナフィーサが呼びさましたからだ。

「いけない！死んではだめ！目を閉じないで！」と。

十八

それは、稲妻のごう音にも負けないほどの強い言葉だった。アイは、たちまち正気に戻った。胸の息苦しさは、一瞬にして消えた。

「ナフィーサ？あなたが、しゃべっているの？」

話すことができず、ただ、身ぶり手ぶりだけで意思を伝えようとしてきたナフィーサ。そのナフィーサが、ジャンの死に悲鳴をあげ、今度は、アイの危機に言葉を話したのだ。

もはや、今の彼女は、完全な人間だった。姿形だけでなく、その魂までも、人間だったころのナフィーサに戻っていた。

「アイ、けっして目を閉じないで。わたしのすることを、最後まで見届けてください！」

ナフィーサは、そう言うと、祈るように天を見上げて両手を高くかかげた。

嵐の闇夜に向かって、すっくと立ち上がったナフィーサの姿は、まさに地獄に咲く一輪の青い花のようだった。

「聞きなさい、天の使いたちよ！」

ナフィーサは、その可憐な姿からは想像もできないような、りんとした声でおごそかに言った。

地上を襲っていた化けものたちは、戦乱の大地と空に高々とひびきわたるナフィーサの声にふり返った。

「天の使いたちよ、罰は、このわたしに与えなさい！わたしは、人間です。わたしの名は、ナフィーサ。ウルマスの生けにえとなるべき者」

アイは、驚いた。

「何を言うの、ナフィーサ！」

もう一度ナフィーサのもとへかけ出そうとしたアイだったが、その行く手に黒い影が立ちはだかった。ナフィーサの呼びかけに応じて、化けものたちが、あっという間に戻ってきたのだ。

アイは、今度こそ殺されると思ったが、ひるむことなく前に突き進もうとした。

ところが、化けものは、そんなアイをひと目にらんだだけで、相手にすらしなかった。そのかわりに、四本の足で空気を蹴るようにしてナフィーサに突進したのだ。

「あぶない！」

アイが悲鳴をあげたのと、小柄なナフィーサの体が宙に舞ったのは同時だった。

雨でぬかるんだ地面に、これでもかというくらい強くたたきつけられたナフィーサは、体をまるめたまま身動きすらできなかったが、やがて、ゆっくりと顔を上げた。

化けものたちが、獲物を見つけて喜んでいるかのように、高く雄たけびをあげた。

「だめ、ナフィーサ！今の言葉を取り消して！」

一匹の化けものの足が、ナフィーサを小石のように蹴り上げた。あまりにも力があったので、ナフィーサの体は、アイの近くまで飛ばされてきた。

アイは、悲鳴をあげながら手をのばしたが、その瞬間、ナフィーサの目が、わずかにほほ笑むのを見た。

しかし、それもつかの間、ナフィーサは、化けものの長い爪につかまれて、もとの場所まで引きずられていった。

彼女は、けっして、逃げようとはしなかった。ただ、取れてしまったヴェールをつかもうと、腕をけんめいに伸ばした。これは、ナフィーサにとって、アイが作ってくれた大切なヴェールなのだ。

ところが、化けものたちは、もう少しでヴェールに届きそうだったナフィーサの右手をふみつけ、その苦しむさまを見て残酷に吠えた。

「やめてっ、お願いだから、やめて！」

アイは、必死にナフィーサのもとへ行こうとしたが、化けものたちにはばまれて、手出しができなかった。

それからのナフィーサは、化けものたちのなすがままだった。

アイからもらった衣装は、泥だらけになり、あちらこちらが引き裂かれていた。白かったはずのはき物にも、まっ赤な血のあとがついてしまった。

そう、血だった。ナフィーサの体からは、人間と同じ赤い血が流れている。

さんざん痛めつけ、もはや、動く気配のなくなったナフィーサを見て、ようやく化けものたちは攻撃をやめた。

アイは、気を失いそうになるのをこらえながら、よろよろとナフィーサのもとへかけよった。化けものたちは、もう、アイのじゃまはしなかった。

「・・・ナフィーサ・・・」

絶望のふちに深く沈みながら、アイは、倒れているナフィーサの前にひざまずいた。

「なぜ・・・、なぜ、あなたは、自ら生けにえになろうとしたの？」

アイは、声をしぼりだすようにして問いかけた。

「あなたが、この国の人間のために、犠牲になる必要なんてどこにもない。だって、ウルマスの人間は、ずっと、あなたをさげすんできたのよ！」

そうだ、人間なんて信用できない！

自分たちさえ生き残れば、生けにえのことなんかどうだっていいと考えている人間。

ひとりを犠牲にして、自分だけ逃げればいいと思っている人間。

もう、何もかも滅びてしまえばいい。

ナフィ―サを生けにえにして、生きのびようとするウルマス国なんか、化けものたちに襲われて、なくなってしまえばいいのだ！

「人間なんか、一度だって、あなたのことを考えてくれなかったじゃない！重い鎖につないで、あなたが死んでしまうことを願っていたじゃない！」

アイは、怒りのままにこぶしを地面にたたきつけ、まるで小さな子供のように大声で泣いた。

ボロボロになってしまったナフィ―サを目の前にして、世界のすべてに復讐してやりたいと思った。

許せない。どうしても、許せない！それなのに、ナフィ―サは、怒りにわれを忘れているアイに向かって言った。

「でも、あなたも人間よ、人間なのよ・・・」

消え入りそうな笑みを浮かべている彼女の顔には、だれかをうらんでいる様子も憎んでいる様子も、まったくなかった。

それどころか、ナフィ―サは、アイのほほを両手で包んで、なぐさめるように言葉を続けた。

「・・・わたしは、みんなを守りたい。ウルマスの子供たちに、・・・すてきな未来を見せてあげたい。そのためなら、喜んで生けにえになります・・・」

乱れた髪の下にあるナフィ―サの二つの目から、赤黒い涙が流れた。それは、彼女の燃えるような魂を宿した美しい血の涙だった。

「でも、わたしがいちばん生きてほしいのは、あなた・・・。あなたは、自分のことをお日さまのようにはなれないと言うかもしれない。でも、・・・暗い夜道を照らす月明かりが、迷い人の命を救うことだってあるのよ・・・」

アイは、泣きながら、ただただ首を小さく横にふることしかできなかった。

こんなにも傷つき、こんなにも力を失い、それでも、ナフィ―サは、わたしのことを思ってくれている。

それを知った時、アイは、自分がこの世に生まれてきたのは、けっして、まちがいではなかったと感じた。たとえ、もうじきなくなってしまう命であっても、今日まで生きてこられてよかった。

父さんを失い、母さんを失い、貧しさの中でひとりさみしく生きてきたアイ。何度、死んでしまった方が楽だと思ってきたことだろう。

でも、世界にたったひとりでも、自分に生きてほしいと思ってくれる人がいる。それだけで、アイには十分だった。

「ナフィーサ、ありがとう。だから、死なないで。ねえ、お願いだから、わたしをひとりにしないで!もしも、あなたが死ぬのなら、わたしも死ぬ。わたし、あなたとなら死んでもいいよ・・・」

アイは、ナフィーサの体を力いっぱい抱きしめた。

大切な人は、みんな、わたしのまわりからいなくなってしまう。もう、だれも失いたくない!わたすものか!この子だけは、絶対にわたすものか!

「・・・泣かないで、アイ。わたしは、どこにも行かないから。・・・ずっと、あなたのそばにいるから」

ナフィーサは、小さな子供をあやすように言った。そうしながら、心の一方でどうしようもない深い悲しみに沈んでいた。

生けにえの黒人形にすぎない自分を、こんなにも愛してくれるアイ。なんて、やさしい心を持った子なのだろう。なんて、汚れのない天子のような命を宿した子なのだろう・・・。アイと離れたくない。本当は、ずっとこの子のそばで生きていたい。けれども、もう、時間がやってきた・・・。

嵐の中で抱きあう二人を、化けものたちが見つめている。いや、化けものであったはずのそれは、いつのまにか、銀の衣をまとった神々たちの姿になっていた。

神々たちは、うやうやしい態度で二人の前にひれ伏し、そのまま、ただの岩へと変わっていった。それは、時の終わりを意味していた。アイとナフィーサが直にふれあえる時の終わりを。

「アイ、ありがとう・・・。永遠に、あなたの心の中に・・・」

力のこもったナフィーサの最期のささやきが、アイの耳もとに小さくかすれて届いた。

「ああ、いけない！」

アイの声は、嵐のような悲しみと絶望におののいた。

「だめだめだめ！だめだよ、ナフィーサ！死んではだめ！」

けれども、アイのさけびは、もはやナフィーサの耳には届かなかった。

アイは感じた。腕に抱いたナフィーサの体から急激に温もりが失われ、かたく冷たい木に戻っていくのを。

「いやだ！こんなのいやだよう。お願いだから、帰ってきてよお・・・」

アイは、悲鳴のようにさけび、ますます涙をあふれさせた。涙によってナフィーサがよみがえるなら、どんなに長い時間でも泣き続けられると思った。

だが、ナフィーサの口から人の言葉が聞かれることは、二度となかった。

終わってしまった。病に倒れ命を落としたはずのナフィーサの短い人生は、今この時、本

当に終わってしまった。

いつの間にか、雨がやんでいた。雷鳴もおさまり、空をおおっていた厚い雲も急速に流れ消え去っていった。

家の地下壕に逃れていたウルマス国の住民たちも、静まり返った外の様子に恐る恐る出てきた。その中には、王宮前の市場でナフィーサとふれあった子供たちの姿もあった。

人々が驚いたのは、それまで激しく燃え盛っていた王国の炎が、あとかたもなく消えていたことだった。

「助かったのか?本当に助かったのか?」

「いったい、何がおこったのだ?なぜ、火が消えている?」

街のいたるところに、無数の遺体が折り重なるようにして横たわっている。そこには、異国の兵士の姿もあったし、ウルマス国の兵士の姿もあった。そして、たくさんの無抵抗な住民たちの姿も。

あちらこちらから、すすり泣きの声が聞こえた。家族を失い、狂ったように泣きさけんでいる人の声も聞こえた。ひどいケガにうめいている人の声も聞こえた。

やがて、東の地平線に朝日が昇りはじめた。生きて朝日をながめられることが、どんなにありがたいか。あまりにも悲惨な一夜であったが、それでも、生き残った人々は、変わることのない宇宙の神秘の前に手をあわせ頭をたれた。

今となっては、東西どちらの軍勢にも、戦いを続ける力は残っていなかった。彼らは疲れ

きった体を引きずるようにして、自分たちの国へ引き上げはじめていた。それを見て、ウルマス国の人々は感情を失ったような歓声をあげた。

「なぜ、こんな奇跡がおこったのだろう？だれかが、太陽の丘で生けにえになったのか？」

だれからともなくあがった言葉に、人々は、太陽の丘へと目をやった。しかし、こたえられる者はひとりとしていない。

人々は、ナフィーサが自ら犠牲となって人間の世界を守ったことなど、何も知らないのだ。

十九

アイは、ジャンとナフィーサの亡きがらの前でひとり地面にうずくまっていた。

何もかも、失ってしまった。

わたしが大切に思っていた、大好きなナフィーサの魂は、絶対に手の届かない遠いどこかへ飛び去ってしまった。

なぜ、わたしは、彼女を守ってあげられなかったのだろう。

生まれた時から、生けにえになることだけを宿命づけられていたナフィーサ。

もっと、楽しい思いをさせてあげたかった。もっと、安らかな日々を送らせてあげたかった。

もしも、彼女が生きていたら、これから、たくさんのうれしいことや楽しいことを、いっしょにわかちあうことができたはずなのに。

その時、アイは人の気配が近づいてくるのに気づいて顔を上げた。

もはや、それが東軍の兵士だろうと西軍の兵士だろうとかまわなかった。アイには抵抗する力などないし、今さら、じたばたしてもはじまらないと思っただけだった。

けれども、太陽の丘へと返り血に染まった姿でやってきたのは、敵の兵士ではなかった。アイは、うつろな視線を相手に向けた。

「・・・そんな目で見るな。おれに言いたいことがあるのは、わかっている。遠慮なく述べるがいい」

アイの前に立ったのは、アルロスだった。彼は、あとをジ―ミナスに任せ、太陽の丘でおこったことを見届けにひとりでやってきた。本音を言えば、アイが無事であるかどうかを確かめたかった。

「なぜ・・・」

アイは、力なく問いかけた。

「なぜ、わたしたちを、この場所へ向かわせたの？はじめから、ナフィ―サを使って神々の怒りを利用するつもりだったのね・・・」

アルロスは、やはり、この娘はすべてを見抜いていたかと思った。ひとつの事実から、表面には見えない真相を読み解くかしこさは、やはり、どこかレイナと似ているような気がした。

「おまえには、どんな、うそいつわりも通じないようだ。たしかに、おれは、黒人形を利用

して、この世界の悪しきものをなくしてしまいたかった。生けにえという呪われた風習も何もかも。言い訳がましく聞こえるだろうが、おれも生けにえによって、妻となるはずだった女を失った。その復讐を果たしたというわけさ」

アイは、じっとアルロスの目を見返した。激しいののしりの言葉をぶつけるべきだったかもしれないが、不思議とそんな感情はおこらなかった。

「生けにえのうらみを、生けにえで返したというの？それで満足？」

「満足か・・・。そうだな、満足できるかと思ったが、そうはならなかった・・・」

アルロスは、正直に答えた。口先でごまかすことなど、とうていできそうになかった。それほど、彼の心は、満たされることなくさまよい続けていた。激しい復讐の炎が燃え尽きたあとに残ったものは、生きているかぎり続くむなしさだけだった。

「しかし、そのおかげで、ウルマス国の民の犠牲は、考えていた以上に少なくとどめられた。もっとも、だからといって、おまえの怒りはおさまらないだろうがな」

そう投げかけられて、アイは、くちびるをかんだ。ナフィーサを失ったくやしさは、はかりしれない。けれども、彼女が残した最期の言葉を思うと、アルロスにつらくあたるのもちがうような気がした。

「わたしが生き残れたのも、あなたのおかげかもしれない。それは、わかってる。ナフィーサは、子供たちの未来を守りたいと言ってた。だから、自らすすんで生けにえになったの。かなえられたのは、彼女の願いよ」

「おまえが大切にしていた黒人形、いや、ナフィ―サが、そんなことを言っていたのか？」

「それでも、わたしはつらい・・・。わたしは、いちばん大切なものを失った。世界が救われたとしても、ナフィ―サは戻ってこない。あなたの愛した人と同じように・・・」

アイの言葉に、アルロスは低くうめいた。そのとおりなのだ。たとえ、神々による奇跡がおこったとしても、死んだ者だけは生き返らない。

復讐しないことには、気がおさまらなかったことも事実だが、その目的を達したからといって、レイナが帰ってくるわけではない。

「・・・相変わらず、はっきりものを言う娘だな。おまえと話していると、調子が狂う」

アルロスは、そう言って天を仰いだ。思いもかけず目頭が熱くなるのをおぼえたが、そんなことは、ひとりでいる時でさえ、滅多におこらなかった。

「多くの人々を救うために生きることも大切だが、時には、目の前のいちばん愛する人のために生きることの方が、より大切な時もある。だが、多数があっての個人というのも、また、事実だ。どこまで問いつめても、答えはない」

結局、どうすることがいちばん正しかったのかは、アイにもアルロスにも、わからなかった。ひとりの命が大切か、それとも、数千数万の命が大切かという話だった。命の重さは、数で計れるのかどうかという問いだった。

「まあいい。今は、命があっただけでもよしと思うことだ。おれは、王宮に戻るが、おまえは、どうする？」

「・・・どうしていいかわかりません。しばらくは、ここにこうしていたい」

「ならば、あとで人を差し向けるから、この者たちの亡きがらを弔うがいい。もしも、おまえに許してもらえるのならな」

アルロスは、そう言って、横たわっているナフィーサとジャンをしばらく見下ろしていたが、やがて、ふっ切れたようにきびすを返した。

が、少し歩みを進めただけで立ち止まり、ふり返ることなくつけ加えた。

「アイ。おれは、おまえがうらやましい。何の迷いもなく、おのれの信じる道を歩めるおまえがな。おれの手は、血まみれだ。もう、引き返すことはできない・・・」

「・・・・・」

アイは、静かにアルロスの言葉を受け止めた。もはや、彼女は、失ったものをつらねてだだをこねるほど子供ではなかった。

アルロスのやったことは、立場がちがえば、自分がやろうとしていたかもしれない。いや、絶対にやっていただろう。彼は彼なりに、おのれの信念にしたがっただけなのだ。

こうして、アイとアルロスは別れた。そして、これ以降、二度と顔をあわせることはなかった。

二人の生きる道はちがっていた。どちらが正しくてどちらが正しくないなどとは、だれにも言えることではなかった。

この直後、正気を失っていたルベルタ四世が、自らののどをかき切って没すると、あと継

ぎのいない混乱をおさめるため、アルロスが武装決起し、臨時の摂政としてまつりごとを行うようになった。

彼は、まず、ウルマス国の復興に全力を注ぎ、多くの傷ついた者たちの命を救った。親を失った子供たちを保護し、民に対しては公平な食料の分配を行なった。

それから、王宮に残された高価な品々を売り払って、壊れたり焼かれたりした建物の再建の費用にあてた。

アルロスの努力は実を結び、ウルマス国は、急激な復興をとげることになる。

ただし、彼は、どんなに周囲からせがまれても、けっして王になろうとはしなかった。摂政の地位についていたのも、権力闘争に明け暮れる上級士官たちを押さえつけるまでの間のことでしかなかった。

その後、アルロスは、自分に与えられていた権限のすべてをジ―ミナスに譲り、まつりごとの表舞台から姿を消した。

数年後、師範として騎士学校の生徒を教えていた彼は、ある日、「海を見に行く」という置き手紙を残して、突然のように消息を絶った。

はるかな東の世界へ旅立ったという言い伝えもあるが、定かではない。知っているのは、おそらくジ―ミナスただひとりであったろう。

摂政の地位を譲られたジ―ミナスは、よく民の声に耳をかたむけ善政をしいた。彼は、王族や貴族という身分を廃し、古代民主制の例にのっとった議会政治を構築した。

こうして、ウルマス国は、王国から民が主体の国となり、五十手前の若さでジ―ミナスがこの世を去ってからも、長く栄えることとなった。

とはいえ、そこに至るのは、まだまだ先のことである。ウルマスの民が味わったそれまでの苦難の道のりは、また、別の機会に語られるべきであろう。

アルロスがいなくなってからも、アイは、その場から立ち去ることができずにいた。このまま、ジャンとナフィ―サの亡きがらを置いていけるわけがなかった。

「どうして、ひとりだけ行っちゃうの？わたしだけおいていくなんて、そんなのひどいよ・・・」

泣き疲れたアイには、もう一滴の涙も残っていなかった。ただ、ナフィ―サを失った悲しみに打ちひしがれ、傷ついた体をかろうじて支えていることしかできなかった。

そんなアイの髪を、風がやさしくなでていった。

風は、まるで赤んぼうをいやすように、何度も何度もアイのまわりを行ったり来たりした。

アイは、ふと、その不思議な気配に気づいた。何か温かなものが、自分の体をふわりと包みこんでくれたような気がした。

「泣かないで、アイ。わたしは、いつまでもあなたのそばにいるから」

アイは、たしかにナフィ―サの声が聞こえたと思った。

まちがえるはずがない。これは、アイが意識を失いかけた時に、その命を救ってくれた声と同じだ。

「ナフィ―サ、あなたなの？」

アイの問いかけに、返事はなかった。あたりを見まわしてみたが、ほかにだれかがいるはずもない。

声は、二度と聞こえてこなかった。

けれども、アイは見たのだ。ジャンとナフィ―サの亡がらのすぐたもとに、小さな木の芽が出ているのを。

「これは・・・」

こんなひびわれた、かわいた大地に木の芽が息吹くなんて。

さっきまではなかったはずの、木の芽だった。

木の芽は、太陽の光を受けてまっすぐにすっくと立っている。それは、天に向かって両手をかかげた時のナフィ―サにそっくりだった。

「ナフィ―サ・・・」

アイは、思った。

これは、きっと、ナフィ―サの生まれ変わりだ。ナフィ―サのおこした、最期の奇跡なのだと。

いつからか、空には、まるくア―チを描いた虹がかかっていた。土のにおい、大気のにおい、空のにおい、そして緑のにおいが静かに香った。

アイは、木の芽をそっと両手で包みこんだ。それは、あまりにも小さくはかない命だった

が、たしかに生きていた。

反対に、今見るナフィーサは、ジャンが作った、こわれた木の人形でしかない。そのあまりにもあたりまえの姿に、アイの心は苦しくうめいた。

アイは、心の中で問い続けた。何度も何度も、問い続けた。

なぜ、この世に生まれた命は、死んでいかなければならないの？死ぬことが定めなのに、なぜ、生まれなければならないの？

教えて、ナフィーサ。

本当の人形って、なんだろう？

本当の人間って、なんだろう・・・。

終章

「さあ、お話はここでおしまい」

木かげに腰かけている老女が、そのまわりにしゃがんでいる子供たちに、屈託のない笑顔を見せた。

「どう、みんなは今の話を信じる？」

老女が問いかけると、子供たちは、われ先に元気よくこたえた。

「わたしは信じる！」

「ぼくも信じるよ！」

「それって、この木のことでしょ？」

ひとりの男の子が、目の前の大きな木を見上げて得意そうに言った。

青い花をたくさんつけたその木は、丘のいちばん高いところにあって、老女と子供たちを強い日差しから守っていた。

この大樹こそ、ナフィーサの残してくれた木の芽が成長した姿なのだった。

幹のかたわらには、ジャンとナフィーサの墓が寄り添うように建てられている。

まわりには緑の芝生が生えていたし、さらにそのまわりには、たくさんの草花が咲き乱れていた。

そして、丘から見下ろす大地には、果てしなく緑が広がっている。

今となっては、このあたりが草木の一本もない荒れた台地だったなどと、だれが想像できるだろう。

あの大災害と戦があった悪夢のような一夜から、長い時が過ぎた。

ナフィーサの木が大きくなり葉を茂らせていくにつれて、それまで荒涼としていた大地にも、少しずつ緑が芽吹いていった。草木は森へと成長し、森は多くの動植物を育んだ。

たくさんの命が失われた。けれども、それ以上の新しい命が誕生したのだった。

あの時、何があったのか？

今となっては、それを知るのは、この世でアイただひとりだけだった。だから、彼女は、自分が真実を伝えなければならないと考え、読み書きを交えて子供たちにすべてを語り伝え

てきたのだ。

子供は大人になり、やがて次の命が産み落とされた。すると、アイは、生まれてきた子供たちにも、ナフィーサのことを教えてあげた。

ナフィーサのことを忘れてほしくない。今、自分たちが生きていられる理由を、みんなにわかってもらいたい。アイは、ただ、それだけを願ってきたのだ。

そのアイも、ずいぶん歳をとった。もう、杖をつかなければ、歩くことすらできないようになってしまった。

それでも、ナフィーサの木と向きあう時、彼女は、十四歳だったあのころのことを、きのうのことのように思い出すのだ。

今日も、アイは、近所の子供たちにナフィーサの話を聞かせていたところだった。そろそろ、王宮の鐘が、昼の時間を知らせるころだ。

「さあ、みんな、うちへ帰ってごはんを食べてきなさい。お母さんが待っているわよ」

アイは、そう言ってイスから立ち上がった。そして、子供たちが飢えることのない時代になった喜びを、しみじみとかみしめた。

丘を下る一本道の脇には、赤や黄色の色とりどりの花々が咲いている。

手をつないで歩くアイたちの近くまで、何匹もの蝶が舞ってきた。その中でも、ひときわ大きな美しく青い蝶が、いちばんうしろを歩いていた男の子の頭に、ぴたっととまった。

「あっ」

うれしくなった男の子は、そっと蝶をつかまえようとしたが、あと少しのところで逃げられてしまった。

蝶は、ヒラヒラとナフィーサの木の方へ飛んでいった。

男の子は、歌いながら丘を下っていくアイたちをふり返ったが、ちょっとだけならいいやと思って蝶のあとを追いかけた。

けれども、ナフィーサの木のたもとまで来た時、その蝶は、ふいにいなくなってしまった。

「あれ？あれ？」

男の子は、あたりをキョロキョロと見まわしたが、蝶はどこにもいない。

すると、その時、ふわっとしたあまい香りのするそよ風が吹いて、男の子の髪をゆらした。

だれかの呼ぶ声が、風といっしょになって耳の奥に聞こえてくる。

気がつくと、青い衣装をまとった少女が、男の子のうしろに立っていた。

「おねえさん、だあれ？」

ふり返った男の子がそう問いかけると、その少女は、ちょっと不器用な動きで腰をかがめ、男の子の頭をやさしくなでた。

ふわっとしたあまい香りは、この少女のにおいだった。

男の子は、ほほを赤くして「おねえさんも、いっしょに行こうよ」と言ったが、少女は、ゆっくりと首を横にふった。

静かにほほ笑んでいる少女は、見たこともないほど美しく、まるで人形のようだ。男の子

は、たちまち、この少女が大好きになってしまったのだった。

「何してるの？早くおいで」

坂の下から、アイが大きな声で男の子を呼んでいる。

「はあい」

男の子は、おなかに空気をいっぱい入れて、元気よく返事をした。

それから、やはり、少女をいっしょにつれていってあげたいと思った。なぜなら、その少女は、アイの話してくれたナフィーサにそっくりだったからだ。

けれども、どうしたことだろう？もう一度、男の子が顔を上げた時、そこには、もう少女の姿はなかった。

「おねえさん？」

男の子は、何度もまばたきをした。

太い木の幹のかげにかくれているのかもしれないと、反対側へまわってみたが、やはり、少女は見あたらない。

今のは、蝶の作り出した幻だったのだろうか？それとも、知らない間に夢を見ていたのだろうか？

「早くしないと、おいてっちゃうぞ」

いたずらっぽく笑っているアイが、手まねきをしている。

男の子は、首をかしげてかけ出した。

たくさんの葉を、太陽に向かって広げているナフィーサの木。

そこには、さっきの少女が残していったあまい香りのするそよ風が、いつまでも静かに吹いているだけだった。